炭俵

阿羅野

曠野員外

誹諧七部

911.3
八

[redacted]

谷啟

[redacted]

壬

生々庵

生々庵主

[redacted]

米胥範

炭俵

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉乃軒に（此三人越後屋手代なり）
かよひ風乃宗としつゝましき心乃泉と[illegible]し十日あまりかく
乃文字の野風と[illegible]つる事[illegible]
あやかる頃の二三子序に[illegible]て[illegible]
華[illegible]宗人乃[illegible]いへる[illegible]
あらんとものゝ[illegible]のさくや[illegible]紙窓[illegible]様に
あとしかも今年乃冬の十日さまよみ[illegible]とき[illegible]ひ
いつる菊乃こしらふ季に入[illegible]うつるうのか[illegible]乃かめ
とをの是に秋の[illegible]なるがやこれをとひさまの日
乃いつとや出しより秋乃風[illegible]しらかし[illegible]
篇あつて彰[illegible]のかつらの二十[illegible]とあふん[illegible]とぞ

きゝしみとし翁乃聲乃[illegible]をあやまら[illegible]文
くみとき炭の翁みてかくふくしくも題号と如く[illegible]
ハ詩乃正様よりいふる[illegible]やまとうたの[illegible]ひ
たハれうわしく例乃ノ口に[illegible]よりぬ
ありつる[illegible]その日芭蕉庵乃前遊[illegible]にやつれ
うすぬ撰乃て[illegible]再三乃調ぬ[illegible]葉末乃て
に[illegible]のうちに多く[illegible]乃[illegible]乃[illegible]
炭乃[illegible]とうち[illegible]つり[illegible]炭[illegible]
ハ誹也[illegible]小子[illegible]とりてよし[illegible]ひ
うる[illegible]此[illegible]ぬ蝶[illegible]このん古て[illegible]
序をて[illegible]此中をとく[illegible]
[illegible]とのつ[illegible]とつくる[illegible]あり[illegible]

うしとろおそはらくむ

元禄七の年夏閏さつき初三の日素龍書

むめがゝにのつと日の出る山路かな　芭蕉

処々に雉子の啼たつ　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　仝

上のたよりにあがる米の直　芭蕉

宵の内はらはらとせし月の雲　仝

藪越はなすあきのさびしき　野坡

ウ

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良がよひおなじつらなる細基手（ホソモト）　野坡

ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出すお袋の事　芭蕉

終宵（ヨモスガラ）尼の持病を押へける　野坡

こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡

露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆のつらりと酔て花の陰　野坡

門で押るゝ壬生（ミブ）の念仏　芭蕉

名

東風々に糞（コヘ）のいきれを吹まはし　仝

たゞ居るまゝに肱（カヒナ）わくなり　野坡

江戸乃左右むかひ乃亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜乃内乃かね乃音　芭蕉
桐乃木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつて寐たる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花さかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東乃方に窓をあけ　野坡
魚に喰あく浜乃雑水　芭蕉

千とり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進乃高乃はてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風乃陰にみゆる菓子盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮓もる　利牛
片はるまるの山坂乃かたまりて　野坡
秋をごまくし圃に相撲場　嵐雪
細くと鍋もこゝろの宿乃月　利牛
早稲米く晩稲賞ゐおもしは　野坡

ウ
泥染を長き流にのばす也　孤屋
あちこちすれば昼のかねうつ　利牛
請状すんで嫁と呼まゝ婆　野坡
てゝしくしも宗参るきわり茱　孤屋
其谷の丸からは墨染聖護院　利牛
砥石のうけとこゝに丸くなり　野坡
捆めまれハいづれあら書北之上　孤屋
人のさゝめ要まもるくり　利牛
狐巡の鞍をとりて日にかへて　野坡
飯すん中なる芋をとる月　孤屋
納豆し雨降はやまてあつまれ風　利牛
新茂みてハ又解がく　野坡

名
身の丸くしまふ親ゝすまめにて　孤屋
抱揚る子の小袖とられん　利牛
ぐりよしと河内の荷物送り出　野坡
心みよりも箸のせんゝく　孤屋
塔こう訪て振の音して蔵にかへり　利牛
こうしの丸く収め内も霧はかめ　野坡
重郷の御免とくとさすまゝ　孤屋
此かいわいの小まゝかよふる　利牛
黍の穂は残れ風に吹倒し　野坡
高場の宮の流れすむ月　孤屋
寺はとうしにぶて人にかゝる　利牛
今年店やすんくらはゞ候　野坡

ウ 雲まつうらへてみそしるたうぶ社　嵐竹
はらりしと雪のふり出し　利牛
隠居乃使きてそれを来ける　野坡
うしろ手乃志水あゐ細川　嵐竹
独(ヒトリ)ある母とてすゝしくぶ乃み　利牛
まゝしんば譲る正月乃餘　野坡

ふか川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁(ヘリ)　孤屋
昼乃水鶏乃はしる溝(ミゾ)川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨ふりて(テ)　岱水
そつとのぞけハ酒乃最中　利牛

又五

寝処に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
ウ きりぎりす薪乃下より鳴出して　利牛
晩乃仕事乃工夫する也　岱水
妹(イモウト)をよい所からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のあかりし跡を見る坊　利牛
鯲汁(ドジヤウ)わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出す　孤屋
この春はどうやら花の静なし　利牛
うれし柳咲かゝる坪にしかく　岱水

宮乃汁吸てしまへ餅有　孤屋

ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉

名 不届(トヾキ)な隣と中のわるうなり　岱水

はつち坊主を上へあがらす　利牛

泣事乃ひそかに出来し浅ぢふに　芭蕉

置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋

着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛

客を送りて提(サゲ)る燭(ショク)台(ダイ)　岱水

今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋

年貢すんだとほめられにけり　芭蕉

息災(ソクサイ)に祖父(チヾ)のしらがのめでたさよ　岱水

堪忍(カンニン)ならぬ七夕の照り　利牛

名月のまに合せばや芋(イモ)畑(バタケ)　芭蕉

涼(スヾ)しくなりて谷に落鮎　孤屋

ウ このごろは宿(ジ)も通りもうすき　利牛

山乃根際乃証ひなり　岱水

ちこ一てれうよく風の吹出し　孤屋

晒(サラシ)乃上に日だまり晴　利牛

花見にも女子ばかりがつれ立て　芭蕉

案乃丸さしなりに菫(スミレ)たんぽゝ　岱水

百韻

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

子は裸父はてゝれで早苗舟　　利牛
岸のいばらの真白に咲く　　野坡
雨あがり珠数懸鳥の鳴出して　　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　　利牛
竿竹に茶色の紬たぐりよせ　　野坡
つるか離れてわめく人あり　　孤屋
[illegible]の肩[illegible]の緒引けかねて　　利牛
掃もしまうて[illegible]ちらし　　野坡
ぢいめ手ぬ本てすり[illegible]ひろうはある　　孤屋
坊主になりもやうそうり仁平か　　利牛
桐[illegible]や矢川へをりて通る　　野坡
鳴子腰もつかし闇の衣　　孤屋

烏カラニ
デチヽメチ笠鵆
ト云アリ

又　七

十二三弁の[illegible]の[illegible]をよみ　　利牛
本堂はしぐれはさらし　　野坡
日のあたる方はあかるむ竹の色　　孤屋
只奇麗なる[illegible]すく[illegible]　　利牛
近江路のうらの詞を[illegible]て　　野坡
天気の桐より[illegible]有の[illegible]　　孤屋
[illegible]にわ[illegible]二頃　　利牛
[illegible]の実落る[illegible]根[illegible]し　　野坡
[illegible]の影[illegible]九ツ過り　　孤屋
[illegible]新拾[illegible]ころの人をそつく　　利牛
ほろしと二日灸の[illegible]　　野坡
ほろし[illegible]に[illegible]　　孤屋

わかい衆と揃ふてくひるておとなしい　利牛
舞(マイ)桐の糸もよにつれる汲(クル)　野坡
隠し子孫ゆゑ武士乃家のつぶし　孤屋
当のつもりの今日も大日照(テリ)　利牛
切燵(コタツ)乃喰ちらしたる極に居こ　野坡
もぐり納豆を紅比麻に施　孤屋
瘡日試ましく冬もなか浮(ウキ)こゝろ　利牛
着てまいりたる下駄乃音しき　野坡
つれあひの名をいふ中も嬉しかり　孤屋
よそりの裏乃遠き井のもと　利牛
あふ木の肩様に有身ある古(ヨメ男子)猩　野坡
ずいきれもあまることつゝん　孤屋

一
ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸でからみし水風呂をやる　野坡
伐(キリ)透(スカ)す樅(モミ)と檜(ヒキ)のすれあひて　孤屋
赤ひ小宮ハあたらしき内　利牛
渋とした宿は男は旅のとうく元　野坡
師走比(ビ)丘(ク)尼(ニ)の諷の寒(サム)さよ　孤屋
餅搗れ向を手伝し賞人かえて　利牛
天満の状を又忘れけり　野坡
廣袖をとうくにひつたる取乃着(キ)　孤屋
むく起(サ)にして参る飲着　利牛
燃さする蕗(フキ)を尻毎に拾ふて　野坡
十ほど西乃刈(カリ)あまり　すゝ　孤屋

海蘊（モヅクトモ）

疊紙（タトウガミ）
シロトトアエルテ ナラス工ニ仰國 ニテモカナアイ トテス
三

岐（キ）之
ハナザクイハ サカイクイ之

内證はまかせきしらけ掛の羽かくさり　利牛

淡打籠ふ海蘊（モヅク）とはら桶　孤屋

機（キ）嫌能いふころも庭に起さる　野坡

小ぞんちのちいろ禅し　利牛

杯（モミ）盞（ダ）に膳（ハシ）の足てあけ生らし　孤屋

謡乃謡のわと金乃くり合は　野坡

麦畑の麩ぬ子流る傲（ハウ）斜（ナゲ）桜　利牛

雪るしもちらし新（ヨリ）組（アワセ）の手斧（テフ）　孤屋

お母に手錢子かくたくれきよ　野坡

又（ギ）所膚乃古足しるしていき　利牛

酒綿（ワタ）をなさへにかくこそ尾（ニンイン）　孤屋

かかそへんうく寂（サミ）しうかり　野坡

縹（タノノ）雲錫（ヌロタ）
武 途ニテ云 シロヨノアカ

ナメスキ 木ノコ 椿
キトリニ 鶏白ナヌフ
ワ

薦まれここすゝ初手と済出し　利牛

一つふりつに館の凍瘡（フミモ）　孤屋

跡乃しに荘（コモ）引ちきる鍋乃月　野坡

古すかま（スキ）ぼよる茸の堺（ヒ）あ八　利牛

（ミミ）めの猿縫とを猪は後ゐ鵙（モヅ）の夢　孤屋

又たのしみく炎流たふりきく　野坡

かどさしは中までとのよ添うてし　利牛

入佛する人千味そらうをとも生れ　孤屋

すちらに来師袷乃新田川　野坡

法宗屋乃み綿る寄乃焼（[illegible]）　利牛

法がくとらんどほどうけすそちれ　孤屋

秋の葉千縫ふしる热汁　野坡

カタキ原京ノ西ニアル所ノ名

[illegible]の内へ[illegible]く居る相撲　利牛

屏[illegible]はうるまへの吟よく　孤屋

むらつるうそく時の雨の音　野坡

かせつてく肩の六角　利牛

拭立てお上の[illegible]居[illegible]つくる　孤屋

高云つのる祠ばかりにて　野坡

大兵のあらくに畑の砂のくて　利牛

[illegible]年菩提しらぬ杉の木　孤屋

[illegible]金[illegible]同心のまちと連　野坡

九九十日隠(シツ)がわ川らし　利牛

投打ちをちるまではぐれてしし　孤屋

[illegible]なし某婆(コバン)よく[illegible]　野坡

里離し[illegible]引の[illegible]つまで　利牛

やら[illegible]の代蟻の襟(エリ)もして　孤屋

土まにくる[illegible]の[illegible](ニヤウ)[illegible](ジバシ)　野坡

うんち果する八もよ北うや　利牛

丁寧(テイネイ)本[illegible]俵の口のより　孤屋

祈請(シヤウ)の済(スミ)てまする節　野坡

名月に[illegible]ちんのあ[illegible]てゆきつ　利牛

包にて戻る縫(ガツ)のやきもの　孤屋

年貝ノ下[illegible]

[illegible]通ぬれをみく年なれ[illegible]欲(ヨク)おりいと　野坡

もそや仕事しなくぬふれさく　利牛

[illegible]病(ツカサ)[illegible]利(ニ)[illegible]とうるさく　孤屋

[illegible]月おりてこいる[illegible]道　野坡

樒もきる鍛冶屋の店さき　利牛
門建ての前の桐油　孤屋
彼岸過ぎ花の咲く　野坡
之人なりと若しれまい　桃隣

春之部發句

イラ戸ハ板戸
ヨコサンハヨコサイ
ト云

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
東雲やまだ戸をしめて松　嵐子
みちのくの名取の海老　杉風
元日や家のゆづりの太刀はかん　京 去来
刀さした供もつれけり年の暮　摂州 広房

いそがしき春を雀のかきくどき　大坂 洒堂
喰つみや木の芽にまじる藤袴　江戸 岱水
鶯いさむ門の練塀　法圓
目出度さも利の詞も年忘　孤屋
初日影春の霞のつれもなし　利牛
年取の祝の名もある松　野坡

梅

梅一木つれて雀の姿かな　湊洎
むめ咲や何乃桜木まきものも　曲翠
むめが香の筋に立よる初日かな　支考
客乃うらとくこまかし
むめちるや糸屑れん日の白人　伊賀 土芳

桜[illegible]満座乃歯茎[illegible] 利牛
赤み[illegible]咲[illegible]乃花 滋刀
みよしの[illegible]桜乃花 卍陂
紅梅[illegible] 松風
[illegible]白つる[illegible] 其角
七[illegible]切[illegible] 卍陂
うち[illegible]若菜摘[illegible] 仙杖
勝丸二[illegible] 吉峨
大[illegible]や[illegible]月 僧 丈草
[illegible] 仙花

猫
[illegible]十五[illegible]二ッ一 利牛
十五[illegible]朧月乃[illegible] 之石
猫乃[illegible] 卍陂
ねこ乃[illegible] 其角

鶯
うぐひす[illegible] 嵐雪
[illegible]の文 其角
うぐひす[illegible] 桃隣
うぐひすや門[illegible] 卍陂
[illegible] 利牛

こねりでもへりして植し柳かな　沙明

隙ごしに雨のあそぶ柳かな　去来

五人ぶちとりてとりたる柳かな　野坡

せきしないの尾に付る柳かな　一風

門ならく出てゆく宿の柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

吉もと嵐山の植込椿かな　孤屋

枝ながく伐らぬ所も椿かな　沙明

念仏のみることのほか椿かな　曲翠

頭にかきしめさせてはつ椿　嵐雪

客の影の猿ぬ家の古椿　文考

まゝ掃除さくらの植替にかゝり　野坡

花

ふらへの花見よとゆく人の　孝紀

蕎麦さかりの表も見るべし人の好き　沙明

ちり手もかまはぬれ枝のけてみちと

四つごきのそろはぬ花見こゝろ哉　芭蕉

あつけなや内で花見もひとゞかく　杉風

うろしやまあらふ花見の友ぞ恋ひ　丈艸

ゆうしの花の木の花のさかりかな

帷下もう小わざの花ちりかゝる　李由

花さかや雨さしうらと実出でたる　文母

銅もの湯を清勝や花の山　孤屋

あらしこそふくんの古有のぬくさかな — 荊口

たふれても柳の（男子）いきる花ごゝろ — 蝉嶺

柿の若葉ゆすらむかしや花の中 — 北枝

牡丹咲くゝもやさみんてくれかゝる — 湖春

あはれなりと花よ五飛乃さかりかな — 其角

ふりよりも手まはにかしむ家桜（長家人え衣） — 嵐雪

やまぶきもちるや小川の水車 — 大津あま 智月

老僧もかゝみかつきしるふるき代 — 大坂 之道

誰母子の柳桜くる遅さかな — 越前福井 某

山桜小川飛こす女かな — 利牛

四五人にしやさくら手折つく庫裏かり — 仝

おちつきは魚やまもるや桜狩 — 仝

折くる桜てかゝやき春の所 — 孤屋

来る夜ても月夜花くてむかれ — 野坡

今乃時みそあつかしるや出さかり — 仝

上巳

帯ほとに川乃なかるゝ塩干かな — 沾圃

広う見よ家乃色やさしもの桃乃花 — 桃隣

うつくしき乃神ハいつきの歳の雛（大和コシコサセン二アリ） — 其角

男の子に師と居るとひなかな — 史邦

比精（羊日シテノトコロ）御餅てかれて来るや桃の花 — 野坡

麻の種毎年蒔る桃の木下 — 利牛

花桶や家乃奥のもの花 — 孤屋

青柳乃泥にしだるゝ塩干かな — 芭蕉

遊しらん

粽つゝむ命寺ニて小ある由かな　淡路島　秀石
春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　芭蕉
麦畑るつくしの藪や二三本　子明
ぼうぼうとこみ焼門のつゝみかな　杉風
ちる乃川やけ乃く堤風乃末　伊賀　様(?)規
江戸ニ居ル(?)
春の夜よ我まし桑乃麦乃嵐かな　仙華
旅行して
浅茅場にて坂より内へ入すゝきかな　北枝
行たる人半ある比孤屋旅立
ともかくも市の川ゆきて見送りて
雪の朝さしかゝりてもかへりみる　北枝
春雨さめくる月立つ別れかな　利牛

夏部之発句

首夏

ほとゝぎす(?)をの音のはりをしるかな　嵐雪
衣更十日はやくは八宗ゆかり　許枝(?)
綿をぬく旅ね八せのしるかな　九節
脊よりやせ行き姿やころもがへ　雪芝
宗乃ゆけさしよほとの茂みかな　子明
扇屋乃暖簾白しころもがへ　利牛

卯の花

本二柳アッテ雨二字ヲ隠リ
卯の花や暗き柳の及ごし　芭蕉
卯乃花や子乃絶ぬたくらんの門　旅行して　支森

う乃花尓芦毛乃馬乃夜明哉　許六

卯乃花尓柚ありくやかつらかけ　支考

鷺しられは

杜若乃語もやすらぬ涼し　めどの舟　鄉東

蓮宗祇池に蓮ある志らへ哉　素堂

うくひすや竹乃子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

又、ヒトツフタツノハシトモ云

ゆふでハ二番尓ねぶりはほとゝきす　桃隣

ほとゝきす一二乃橋乃夜明哉　其角

紙帳肴まん出そせんほとゝきす　嵐雪

挑灯乃くらきに拾なしほとゝきす　杉風

木かくれて茶摘も聞や郭公　芭蕉

まつやまかうしやる子規　素堂

時鳥啼し風が雨になりける　利牛

子規鳴乃出る日める拍子哉　野坡

麦

柿もりに麦穂いやしや伴どうり　荊口

麦乃穂やたよりにつかむや崩路山　千川

麦刈ん園植や道き蛍哉　許六

翁乃旅行を川さきまで送りて

刈こみし麦乃匂ひや宿乃内　利牛

みかへし　野牛

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

みかへしこゝろ哉

浦風やむしる蟬のなかきこゑ　信水

端午

あらく雨や幟に付る小人形　北角

ますら男の鎧(フキミテ)くみるや侍きれ風の色　大坂 細堂

五月近き乱すみかゝるあやめかな　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをのやこゝ首の骨こそ甲かな　仙花

帷子にかみきてしめき鎧きらゝ　李彩

夏旅

草枕みかへて町のあつさかな　卧高

粽東に足向いあつし足おもあ　斜嶺

二三日鶏小晴しもあつさ川　尾張 曽町

ちげ山の力乃くゝめあつさ哉　猿雖

一もとの池や蓮しらぬ茶の匂ひ　芭蕉

此句は湊田よりの便に

五月雨

はみる水やよろい一剣る九本橋　素龍

五月雨ならい細(イ)やたゝ川大和川　桃隣

はらゝ水に小鮒とはぎる手まくり　北坡

五月雨や雲のはなる菖蒲(さうぶ)葺　嵐蘭

このうち称様よりきてこぬ

五月雨や顔(カホ)もよくてもあつけ　信水

涼

川中の根(木ノ根)木によこたふ涼かな　芭蕉

雑魚(ザツコ)ハ

尉斗(ノシ)ハ鰒ニテ拵ル

有明にうつく夜寒や茶乃光り　　廿一うてか

浮しきより掃寄る竹の枝　　千代 蝶十七

汁焚をきいつてそらするすゝはき　　柳之

涼風らすく照て浮し和気持　　智月

まーさとかれより拵乃雫うけ　　元峯

まーさや浮洲のよれはごろぐ　　去舟

夕まみあるあきし石にのかりかな　　冊坡

之ヶ月気ん隠居てすむ起ゝ石むしらす　　素堂

橋や宝寺桃花ありところ　　杉風

尉斗むくや胡葉すーき汁う之　　正秀

世乃中ーや年貢為乃ゝの花　　里東

よろ少年こへてよりちゝ茶飯かな　　嵐雪

木曽路にて
山吹も巴も出る田植かな　　許六

ひるかほや雨降たらぬ花の色　　智月

木ノシタリシ山
さくら山やくもすきぬるさくらかみ　　小観

啄木乃めぐさきさやとまりの花　　丁明

菊乃雨こぼるゝうつる花かな　　大丹

蕣しの雨乃夕や　あり葵　　仙花

一つまれ蝶もうつゝつくわら花かな　　楚舟

まりうるや蝶うらく李の園　　三の李由

猪の牙にかきる茶ノ花　こうたよ　　曲有

国夢猪町乃あつきこうの風　　嵐

一 生松ハ料理ヤ
統ヲ生魚ヲ
肴ニテヨノ
記之

けりとよい鋸もれし梅や雪の山寺　社明

一枝はすけなよ竹のわらくちた　沙花

竹乃子や四人ばかり囲ふき乃らの剣　岩毛

まろべき人借り酒をたのしむ子どもかぐ
飛かうひて誰もしむきるれある会に
うれしとよくあくよろさある八月ちうと
名なる分まりとれ出てあふるせんれ
あれく汗をかきまく

涼して湯よ名乃つくあつさ哉　利牛

ある人の別荘にいきける時
て物ありしを夕つくしかのくさを花籬で

行雲をねてゐるくみるや夜哉　世坡

秋之部

名月

秋のあはれいつれもの中ゆか
月と遊びて時候の声をあらはす

名月やしろつめる戸の夜一よさ　湖春

名月や振れよりし素の庭ら　岩朶

宗世かてうとしても内夜かな　荷兮

名月や誰吹起し森乃松　洒堂

松陰や生扨ゆし江乃月見　里東

わらい水の揺りむくさよふ乃月　利牛

まこしいまるい宿としき滝の月　其角

むさしの仲秋のことをしかてをば／\
望ノ峯ヲ不盡筑波と

明月や不二見ゆるとするの町　素竹

七夕

笹の葉に裁物てやほしむく　其角

星合を見かをにやかやの縁　孤屋

七夕やふりにけりあまの川　嵐雪

盂蘭盆

ともしびの（火ノチラスル）何やむすぶ　洒堂

踊るへきほとに雨降る盆の月　李由

盆の月わきてさびしき門をしきりけり　野坡

朝良

閑関

朝良やみつ（ヤヒヒ）へ詫びさびし門の燈　去来

朝良やしかも日像の蚊のなる燈　利合

エヨナユノメル哥ニ
梅ガ香ヲ
桜ノ巻ニ
ニホワセテ
柳ガ枝ニ
サカセテシハサ（ミ）
カナ
はテシニテストノ
テシ哥ナノタナ
ミヘシ

てしらるるおもしろし柳哉　游刀

秋虫

手よりも声ぞしみけりきりぎりす　智月

物いふ人の後手はやきりぎりす　土芳

擣衣手よんで夜さむにきりぎりす　為有

くらきや鳴て追やる猿の上　孤屋

雁

交雁の帰るも見えぬ新小雁哉　車庸

人のもろまよりて
雁のこゑや視の形暁（視ノカタニ）　去来

旅行のしるし（スジカイニタテニサヤナリ）
とらわれやすらひに見えし雁の声　土芳

草花

しら露乃萩やこぼるゝ秋の花　桃隣

花すゝきそよへちるや枝すゝ先　路通

[illegible]乃萩や刈らん猫の縁　猿雖

芦乃花も[illegible]折るころ
あふ[illegible]はるゝ　丈艸

芦乃うら吹くあらしや客の[illegible]　去来

此中の草花とゝく
草花や[illegible]のすれちる音るし　其角

園菊

菊畑おくある霧におられけり　杉風

秋の菊[illegible]出し[illegible]　桃隣

秋植物

柿のあるを[illegible]のよりところ　利牛

[illegible]や谷中[illegible]蟹の甲　杜國

秋風や萩子乃枝乃あし[illegible]　尚白

[illegible]に干て[illegible]榎の桃　祇丞

[illegible]の名とある[illegible]世南[illegible]天の[illegible]人と乃[illegible]一[illegible]やさし[illegible]名聞ハ[illegible]乃[illegible]天[illegible]日[illegible]の[illegible]れハ

あきとうろや石見潟のもよほして竹桜
のそらのこしにあらはよそれは合しきすみれ
すりちらのこれをきおもけ乃つるへにまかりふして
きよ乃ちうれ云猪乃つまおもひのひらけそ
よりるかとあやうくみく須とそらかき
るらひすいられもしおすみすたらさしき
うし鵠つり鶏乃ちふきおふくしつれ
てびん小鶴の口をとうつろてみきるかるかり
らそんる出来乃ときしふてれ出られれなへ
すれと豆毬乃山紅葉乃色をみえるを
家宗の頂よくそりくいいてある人
少年かしてあ畑さね身みちの所より乃

かきへけこしよ一毛らなさかんちかきあもとに
ひろうみのかしを石食としすかりさしか
いやしやうらへきみむとあきしいうちなの
人てり陸奥をきうつれるいよふし所を尋
よみ出へきにひきさりおかきんすれて少年
とあらふ

石見潟を染たる根一つまでや声ぐるし　桜花

欽しらは

お様そ見おろし見し林乃ちるらしき　少浪公

あめふらはやや安宗出まれ身の錦藻に　ま京

須ひより冬お溪おの白なくね　仙堂

秋のくれいよいよかたしら蘭武　若竹

草稍や茨藩行も四人ハ菊しらぬ　　利合

夕白の汁ハ秋しる夜寒かな　　支考

から秋ハ風にそよぐ[illegible]　　如行

秋風に煙やあらぬかきつの上　　從し

庵くしの行燈ちらし月の雲　　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　　其角

市中や木の葉[illegible]　　桃隣

霜の後撫子さける火桶かな　　芭蕉

桜木や霜[illegible]　　支梁

鳩の栄乃[illegible]　　鈍核

刈あとや水の跡乃あらはれなるや　　桐実

鳴ハ枯ふりふりて吹小山に　　野巷

初霜や猫乃毛もたつ台所　　沙集

凩や鱶の汁来猫の面　　八桑

[illegible]　　桃隣

[illegible]　　游刀

時雨

芋[illegible]つらし[illegible]　　荊口

馬上より[illegible]時雨[illegible]　　丈艸

[illegible]

かくれ家の[illegible]時雨[illegible]　　[illegible]

土用とかはれてなくしたしかはれ　許六

振売のこゑ
小夜霰とあたりの臼を挽やまた　野坡

大根引といふ事を
鞍壺に小坊主のるや大根引　芭蕉

洗ひあげとられくれなゐに大根引　野坡

菜畑菜ぐるまの土大根　西華

此むさきを下の五文字にすへて
人の粉糠をまぶるさむさ哉　野坡

その時も先指折りさむさ哉　宗匠

冬麦切に飛もあきし寒さ哉　利牛

冬かれしてかれ草くしみの月　残香

生鮭や魚うち上て月の月　里東

太の二日とふ川のくとこ一ふし比

秋ふりの秋乃ちしふかうるをみく

かくるふ列し　岱

雪

雪つもる程に氣をとられけり　野坡

初雪や此ヶ所のまへしら　利牛

雪や端の嵐の暮るる上　孤山

雪の日さき傍て　鳥鵜　依と

雪のあやうすくるるそし知
その衣紋とあけて　桃雛

杉の[illegible]し　杉の[illegible]　支考

[illegible]や[illegible]　[illegible]

こつこつや[illegible]　許六

[illegible]　[illegible]

海山は[illegible]　[illegible]

河の面や曲突天子[illegible]　素龍

題不知

かゝし[illegible]　浪化

[illegible]や[illegible]　[illegible]

[illegible]　許六

[illegible]　[illegible]

白うとの[illegible]松の[illegible]　之道

桜の花や[illegible]　丈艸

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

海へ[illegible]や[illegible]の[illegible]　仝

[illegible]

[illegible]大工[illegible]　芭蕉

[illegible]　[illegible]

餅つきや[illegible]　[illegible]

山[illegible]　[illegible]

[illegible]や[illegible]　智月

歳暮

こゝろ[illegible]　杉風

ちりまきあへ紙乃はらくわへの手を　和子池

散しようらく雲一羽とまりの千鳥哉　知月

諸姉は乃けなくしきよ年の暮や　孤屋

そのゝ梅は敷ものしらこの時代　揖斐

手乃はに白いさゝ誹諧法乃みや　丹波

甘ら草よりのみけら和乃ぞ

いろりしきつ黒この一ケやま

瓜ぬくくふやさしやあとこまり　素郎

けふよりはゝしく状みの　路考

誹諧秋之部

四ッ二丈人山門之
宮殿ニ入リて

秋乃声尾上の松ゝ離れから　其角

去年より一羽淋しや初あらし　孤屋

新らしき肚(ヰン)鐘(ガネ)掛る月見哉　仝

月乃隠して明神(ヒヨトヒン)乃門　其角

神文の月の出桶も露ほとゝ　仝

つれひとハ菊もたてこそ蒸されれ　孤屋

下京ハ蕎治乃薫和まつ出て　仝

坊主の花見て施餓鬼を抄のしる　其角

足慢ル子あしらく居る松の下　孤屋

烏啼ら一寸雲乱乃針　其角

田乃畔(アゼ)籾(ムギ)苗担て振る　孤屋

庵者乃寄る絹の音乃節(フシ)　其角

りく枕かり出 さらぬさし珠　孤屋

乱れおちて うつろふ月　其角

縄縄し鯰乃さ小くし　孤屋

屑れ乃ふ[illegible]かくの[illegible]　其角

[illegible]洋乃梅沫植乃節かへる　孤屋

むつしの子あのさめぐせて盃　其角

りざん[illegible]るさ全みつひる　今

尾張ノ宮ヨリ手ニ〻テ賣ニ出ル、ふ乃縮乃あつしき内　孤屋

[illegible]かけれ[illegible]まさ小てやつれ　其角

アバタ モロホイテ あけさとりへく小僧におうれ　孤屋

年ノ豆ヲ[illegible]メツブシノ 鮭乃盤窓[illegible]乃[illegible]もおちて　其角

[illegible]ときふうしよう風[illegible]と[illegible]　孤屋

[illegible]くこり小漂ほ[illegible]かく　其角

櫟と[illegible]の行[illegible]つる[illegible]　孤屋

[illegible]待く萍の[illegible]する秋乃[illegible]　其角

小く[illegible]れ月乃空し　孤屋

紙[illegible]しくふう[illegible]の[illegible]　其角

上[illegible]筆[illegible]し[illegible]くおく[illegible]　孤屋

ソコラワク日和モテテラシテイルフ子ニ

名ウ 小窓[illegible]行[illegible]てたるかく　其角

[illegible]小ゆ[illegible]つく[illegible]乃あね　孤屋

孤屋[illegible]く[illegible]くのか[illegible]出る

[illegible]未満[illegible]く[illegible]りぬ

其角　孤屋　五十六句

ゑ世氏 留別

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐の広がる　桃隣
銅壺(ドウコ)よりなまぬる湯(ユ)を汲んで出し　野坡
つよふ降たる雨のついやむ　利牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
近くに居れど長谷(セ)へ行かぬ　野坡
年よりは昔と常住(ジャウヂウ)[illegible]思し　利牛
いつより寒い十月のそら　桃隣
[illegible]ハ[illegible]工[illegible]　野坡

絹平イ

[illegible]かしき蝶乃仕合　利牛
[illegible]障子[illegible]らん　桃鄰
[illegible]かゝる[illegible]　野坡
[illegible]盆の前　利牛
[illegible]思ひきらしあきらめし　桃鄰
人の地[illegible](カヂ)[illegible]宗[illegible]　野坡
[illegible]生も十から[illegible]　利牛
より平(ヒラ)の機(ハタ)に火桶ハとらぬ[illegible]　桃鄰
むかしの[illegible](ミヤウ)[illegible]　野坡
[illegible]来て[illegible]　利牛
[illegible]きか[illegible]ハつく　桃鄰
[illegible]乃茶ハきらし　秋の[illegible]　野坡

霜月童に

杉の木末に月かたぶくし　利牛

門の是の煙乃あくどく　桃鄰

きりぎりす藪の風に綵　野坡

よいやしに家まな板を立て置　利牛

ちやりしん拍子しあくめ痛し　桃鄰

帷子は肩よりうらも暑さかて　野坡

京から抱別家に余入　利牛

施者年始分る當趣　桃隣

隣の浅みてつらく新ら合　利牛

鋸立ち窮餅るまると無也　野坡

先沖までハみゆる入舟　桃隣

内くらり薪かさねて花の塵　利牛

ちつとも風のふかぬ長閑さ　野坡

非番の日はゞ鴫の河にて無事

振賣の厨たうくしく喜滿　芭蕉

降てハやすミし時雨する軒　野坡

鵜つかひの樋バし小節を付して　孤屋

隣ちる山の月をみるかな　利牛

娵姑の餘と縁あかしの風　野坡

割木乃安き国乃京ぶれ　芭蕉

銅乃もと近つきあまる箔つけて　利牛

里子へハそろへ　二十八日　孤屋

ひだるきハ殊に軍乃大事也　芭蕉

溪氣乃[illegible]新詩も[illegible] 北枝

明[illegible]山路桃[illegible]と[illegible] 孤屋

肩[illegible]湯[illegible]の[illegible] 利牛

上ハ[illegible]れ二三[illegible]の[illegible] 北枝

[illegible] 芭蕉

[illegible] 孤屋

[illegible]川[illegible] 利牛

[illegible] 芭蕉

[illegible] 北枝

[illegible]上 孤屋

[illegible] 利牛

川[illegible]乃帯[illegible]の水と[illegible] 北枝

イケス二ナルコシ
ツケテ[illegible]

平[illegible]乃[illegible] 芭蕉

十[illegible]と[illegible]向乃[illegible] 利牛

[illegible] 孤屋

[illegible] 芭蕉

み[illegible] 北枝

[illegible] 孤屋

[illegible]この[illegible]乃[illegible] 利牛

[illegible] 北枝

[illegible] 芭蕉

風[illegible]秋乃[illegible] 利牛

[illegible] 孤屋

[illegible] 芭蕉

子チ三ヤクハ人ノ子ツニヤク チヤトミテ群集スル形カ 竹ヨルカタチ

渥覓(子チ三ヤクハ)頑愚ノ貌
茶ノ湯ノ炭

目くまりのつまれねぢくく　野坡
そこもうちも茶乃一向中村から　孤屋
掃除されちり浜ちらしまちん風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟浜に打明て　芭蕉
あいふしにきる大名乃供　子珊
才にあたる風もふハりと月の秋　桃隣
粟をとるべしいつまでも雀代　利牛

林ナトアル家ヘ行 皮トセツタトヲカヘルナリ

ウ
能々とれ漬き物する秋乃水　岱水
ぬれつらえて鰹節分る　野坡
二三番まで座敷かゝらぬ門の供　子珊
寒乃蒲団のさいる一言　沾圃
竹の皮雪踏におろす夜れ寒　石菊
稲子のきしる雨乃まゝし　杉風
錺者は一人もみえぬ浦乃秋　野坡
めつらし年風ふくさに土すき　利合
謡し乃月とかこちて難志エ　依々
柴の中へのぞむ日のてゆる　桃隣
茶売れうつれきハつく上に花ちりて　子珊
川らしくなく小鮎しかける　石菊

名

[illegible]　松風

聲[illegible]山へ行[illegible]　岱水

[illegible]　孤屋

[illegible]　芦人

[illegible]　桃隣

[illegible]　依々

[illegible]　浩圃

給仕[illegible]　子珊

[illegible]　利牛

又けさも餅の[illegible]　松風

[illegible]　利合

[illegible]祖母の[illegible]　野坡

ス丶ケヌル

[illegible]　子珊

[illegible]　利牛

[illegible]　芦人

[illegible]　松風

[illegible]　桃隣

[illegible]　岱水

松風　五　　許枝　三　　孤屋　二

浩圃　二　　芦意　一　　石菜　二

子珊　五　　利合　二　　桃隣　四

依々　二　　利牛　三　　芦人　二

岱水　三

撰者芭蕉門人
志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

阿羅野

尾陽蓬左（ホウサ）橿木（ホク）堂（ダウ）主人荷兮子集を編て名を
あら野といふ何故に此名ある事をしらす予はるかに
おもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の云捨
あつめて冬の日といふ其日かげ相續て春の日また
世にかゞやかすげにや衣更着やよひの空のけしき
柳桜の錦を争ひてふ鳥のをのがさま〳〵なる風情
につきていさゝか實をそこなふものもあればにや
いとふかゝりし手にかゝれるもしれなくかれきうたて
て姫ゆりの何にもつかず雲雀の大空にはなれ
て無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと此野
の原の野守とはなるべらし

元禄二年弥生　　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の芳野山　　貞室

あかまでといへる花のあらしかな　　路通

厳の屋根あけゆく色やそれの林哉　　信徳

まるか北山ところ〳〵てくらま山　　昌風

菴淋し花の後の思かな　　友五

山里は隣のあかる花の陰　　尚白

何事ぞ花みる人の長刀　　去来

みよし乃の雲をきてハ花に帰るにし　北水
さくら乃あらし下戸引て蕗るゝいかに　丞同
下への下此寄とりわふ花の尚　越又
花乃山常市折くゆる枝もかし　津島 一井
見あけしよりとふかりぬ花の滝　俊似
兄弟乃いつはなり花乃とき　嵐輝
ちるも花も酒出る人をし　舟泉
塗汁に散てしよしや花乃陰　胡及
きつ花斗波に傘りてはいゝやし　長江
柴舟乃花咲けり有乃ゝ雨　津島 卜枝
おしより花よちて通りけり花の枝　鴎歩
連さつや従者ハおもしろ花乃時　荷兮

花瘡の泪あらしなひそゆる花ぞれ　傘下
あくらふやの風車売花ぬさき　荷芝
花よきてうつらしく盛人多れ　とつ
山あひ乃を夕見れ多か夕月の影　心苗
柳毎しるや理窟は聞すに花の雲　越人
折りあひやちる花を此杣にまれ　北水
独ちらく友迷ひけり花の山　冬松
花見るとこりて薪わる尾上哉　冬文
首出て花乃花のむちを聴き哉　荷兮
酒のみに語らむ人乃綺手
月花もなくて酒のむひとりかな　芭蕉
ある人乃山家にいたりて

櫨の木のあれにかまかせぬすゝき哉　仝

杜宇二十句

ほとゝきすいて畑をくまなく求ねて行方ハ不

さるを楽軍代豪鐵らつうし郭公　雲吟

月まちてまつる山ほとゝきす初ねかな　素堂

りうしきの中に竹のり蜀魄　鈎雪

蝙蝠乃ゐるあふつしやほとゝきす　残人

おふし子乃口よりまるや時ある　去下

初やきん先乱乃つく世ましの郭公　幸五

ほとゝきすとふひとゝはさる世の聲き　柳風

ある人のかなしみて去年やよるまくらへ

都のほとゝきすやもちかき鳥かな　嵐蘭

晴ちるは雲の嶋やほとゝきす　落梧

娵が宿奥きはえぬや時鳥　一髪

こゝ終りしはしや郭公　同

淀にて

行くきんはするかたなき枚方かな　風泉

聴しさや淀の山先のほとゝきす　岐阜 杏雨

あつるしや八丈起きく郭公　傘下

ふゝかゝとやかるかはしきほとゝきす　同

てふてるなくもあひの郭公　泝可

きあつ問の朋て残りと思しられふ　大津 智月

ふかきミほかくれ人の郭公

うつゝたまさゝふきれ郭公　李桃

うつゝなく暮なんとおもふきは　帝山

月三十句

かゝるしも笹のうへゆく月静か　（土黒）梅舌
これほども月見る中の猶かな　満水
月ひとつをひとつからの今宵かな　一峯
面形のくまぐまもるゝの岸あかう　越人
なうれしさも朝膳むく月夜かな　昌碧
衣うつ（衣ウヅリイテ）案の声ハさらぬしや月の影　（津島）帝柳
おもしろふ和歌で詠る月夜かな　一髪
よき程も見えぬ紙燭も月の出かな　水虹
峠迄硯抱く月見かな　任他
一つ家やいさよふ夜るの月　魚洞

名月ハ夜明るきはもあけかな　越人
名月やとしに十二はあるものを　文鱗
名月やいはきを見て降る舟　昌碧
めいげつや声もしてあさくさのすゝき　傘下
名月や戦の跡と大かたを　二水
月見すつしくおえて人の月見かな　冊水
名月のかんざしのそよぎかな
むつかしと月見る日ハ火たく燭（タカシ）し　荷兮
いつの月も記と寄りて名月し　仝
名月や海もおもはぬ山もあれ　玄寿
名月や戸と下とのむつまじき　胡及
あいさつハあつきもおちる林かな　詢竜

三日月や一松かさしや月の影　一髪
十三夜
新嫁も[illegible]女郎花るや月夜哉　松風
朔日
花らしや月の気も有し海の果　[illegible]
二日
見る人もなし[illegible]月の夕　[illegible]
三日
何[illegible]えて[illegible]も似たる月　芭蕉
四日
夕月夜あんどんりして[illegible]　卜枝
五日

何日ともなくさ[illegible]や月の月　伊賀　一泉
六日
深川の[illegible]や月をも　[illegible]　露声
七日
飛[illegible]て[illegible]月夜哉　岐阜　一髪
雪二十句
大付かし
雪の日や[illegible]新の色　里角
[illegible]ふろ婦ふまて　芭蕉
竹乃[illegible]花[illegible]　露文
かさある也[illegible]山　京　加生
車乃[illegible]しくれ　加賀　小春

まつ宵やくらえてうく誰か法八つ　越人

はつ雪に明ぬ宵の枯薄　芒葉

ものゝけの[illegible]しぬ[illegible]一つ[illegible]　雲芳

くゝきしむ物陰[illegible]の隈　二水

雪降て[illegible]いる[illegible]　亀仙

氷の[illegible]枝折[illegible]　岐阜 除風

雪けしや川[illegible]　塵打

初雪や[illegible]　傘下

[illegible]大雨より小舟[illegible]　芳川

[illegible]声[illegible]　冬文

[illegible]やの声　桂夕

[illegible]　荷兮

はつ雪や先草履にて隣まで　路通

はつ雪や雪汁[illegible]　北枝

雪けしていくら[illegible]の雪　芳川

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

[illegible]花の春　古梵

わか水や凡千年のつるべ縄　風吟

松かざり伊勢が家買人は誰　其角

うくひすの[illegible]　文鱗

月雪や[illegible]去年の門の松　去来

かざり[illegible]て年ふる柳哉　一晶

[illegible]　路通

為テモナシ 遂ニ為テモ ナシノハ

元日は帽子ゆかしかなしき川　加賀　一笑
歯固や年の祝ふ白ふ川　大垣　如行
蝸牛の旅さらは鳥の旅へしの春　岐阜　落梧
あれ(?)はうらけてよき花枕　惣同
伊勢海老や御(?)非(?)にも松の春　同
とふきれなれはつたてかむ白梅　畠顕
若年の子ちいさく名もしら草(?)　元広
小(?)桐子栗やのうものうと　去来
とし宮の千秋楽紙なからむ　同
山紫水明らく向ふし待竈の舟(?)　章之
松さくしく馬たち年のさと　約言
月花の都も静けき来とりか　仝

ウラ白ハ七五三メ縄カザリニ付ル義ナリ

連歌せて吾ふる手を住(?)をとりる四方の春　一井
のうじ白もかざりけるる霜のうち(?)　胡及
松(?)に花や松の新年のはつ(?)法　素虹
そ新しく暦て御代の御代(?)　氣浮
すな姫や手のつみ面いかくる殊　同
蓬莱や舟の通ひの家もさえ　嵐水
御年神の宿てしら衣も松の葉　如白(?)
のとかやとしの日てらし　朴付
きさらに(?)したらとかの魁　千文
正月の魚のかしらや炭だはら　傘下
をさめなさくひらさめ関の旅　冬松
あいしらふ松のみき門ならひや　柳風

大服ハ一斗のますの内にも作り　防川
紫れ驚すい一年斗かこ　大山 昌梧
傘平画翠らしもりうえうえ棚　夕々
袖すりて松乃葉ちきるよりの春　安吉
恵もて人るまやう見えかつこ　世水
賑わえす大の朝やたうふくらう　今
まつますもれかて鯛かぬし鰹魚て　越人
初音や浜名の橋の名れさ国　今
声々やしれ沢の濁るも木の麦藁　坂山 徐行
乃松葉乃やとが浦の明の朝かり　同
白ねしやむらしハまつ松補つる　僧 同
我ハ菜園も生きる志つもらぬ　越齋

家鶯武をしはもあるもしら家の宴　貞室

初春

若菜つむ山ハ木を割畑作　越人
精出して摘ともえぬ若菜哉　世拓
七草のいそぎからちもて返す哉　桑名 俊似
女子もし売るあしの若菜かな　加賀 小春
御勝で被の打囲き儀菜哉　夜羅
音うらものとてをうぬ若菜哉　岐阜 素秋
石阶くつれうら梅花しくうそ　玄察
夜寝て摘く打かなし若菜乃宿　酹歩
むかしのなちの乱すはいうめりし哉　越人
薮見えもいもとうぬわらん梅の花　康招

梅折てあくつて又迎へ世中かな　一髪
蓑もれてきらきらすいくさおかさき　冬松
みの山しらるれは梅のさかりかな　蕉笠
網代民部の息雪堂に逢て
梅の木に猶やとり木や梅の花　芭蕉
うくひすの唱(エ)てころふつる嵐かな　まつ 示風
鶯は餌ひろふ片手まし　ちり
あさ川のや鶯とまるそ鶲飛　伊賀 一桐
鶯やちいさき藪(ヤブ)も捨かたし　かゝ 一笑
うくひすは声も勝たる社かな　仝 市柳
鶯や譬へしもなき紅梅哉　仝 夢々
うくひすに玖瑳(?)与(?)て行こゑ　梅舌

ちやうすならやとよゝの盥の水　野水
ゆくしての波のえあふ紅ゝの花　塵交
野人の蓬とりかわをあらふ水　及文
かれしはやゝかけろふの一二寸　芭蕉
うちとけてや馬の眼はるかに　傘下
木仏のうへなる蓬まゝいつ　路通
蝶々猶泊るらしきやもの枝　荷兮
當座興
　さし木
つき立し人のめきてくるさし木かな　一井
衣ノ部下巻ニ 接木
つきの下みるる継穂かな　傘下

唯の泊ぬれにあふるはるのみづ　芦雪

同

藪深く蝶気のつかぬつばき哉　卜枝

春雨

盲人ノ誹人

うき雨はいつもよそ目にこゝろかな　潜知

同

はるの雨ちるまと呼てくらし　嵐滓

本庄亭

春や好きの尻つまげて白尾かな　世水

椰の井にまだ雨ふる家かな　之牛

立白すみ草らんで目明かな　土峯系姫

すごしと袖を摘りはらし　丹泉

すご／＼とつむやつまずや土筆　其角

すご／＼と案山子のもり土筆　蕪笠

古枯やたてたてくるつくし　琢車

川井やまだのつゝみつくし　之文

土筆の跡にある出たる杭　一ヨリタニ〳〵タマル　之仁

業平みし人池に鶴を放たれし　筆意をみてかし

池に鶴残し柳の下に柳哉　素堂

風の吹方に後ろ柳哉　世水

はら／＼と那しとくり柳哉　鐵人

さし柳して暮かしお前や　一笑

ひとりとなりてなくよる柳哉　小春

すられて柳は風にとらるゝむ　一以本

十

とりつきて筏(イカダ)ともしるやなきかな　昌碧

さそはれ[illegible]の曲きまぬ柳かな　杏雨

うらゝくて垣ねのうへ柳かな　此橘

吹風に牛のもさむし柳かな　杏雨

咲水に鶯はよするやなきかな　松芳

うちかゝぬ日たわかりの柳かな　抜遊

しほらしき散滴落とまぬ柳かな　舟[illegible]

蝸蝓(カタツムリ)牛みるほとの月の柳かな　同

まつ柳にかゝりて西は車かな　素秋

うゐいきに結へころふ柳かな　鴎朱

菓の名は忘れぬ柿子かな　生村

仲春

麦の穂に菜のちれうる気かな　不梅

菜丼花や松葉の出来しあいる　出紅

花丼花丼花おふうつゝ月かな　傘[illegible]

菜み花の畦うちのこちかゝかな　法同

うこくくもみくらべて畑かの茶雜かな　玄外

野山手をはし集ふそてゝるや蘭　岩渓

つきさまて折(ヲリ)えくを待くさらしかな　越人

座ぬ庭に一寸桃しさかりかな　笑軒

よきし鶯(百姓ノ夜)ささらく咲はすゝ　陰風

手乃とくほと老折られる桜かな　一楊

うしろよりの梢の桜かな　冬松

白こしよ山やくれは花道されゆる　一髪

ちる風にちらくとしてかるやかに行けり　好水

振ヲ上ミシテ隙ヲ見ル
あふのきて寝て那辺の空を行けり　徐風

ころもよりくとある山る蝶なりけり　一壱

わらひも輪縄解てやる蝶なり　清車

手をついて音もあくらる蝶なりけり　山崎　宗鑑

啼ころていあるひすめかくれらな　落梧

あらうえとむつうしきうちる蝶　越人

いくすくも背わる山岸のかすみけり　去来

飛乃かしらはしりゆく蝶かな　落梧

不図と飛く猿小跡あと乃蝶かな　津島　雲下

虫やらしの麝獺子いるかてちらる　一井

まつ蝶桜四人のつる虫たいふかな　柳風

椶櫚の葉にとまりてゐる胡蝶かな　抜餌

かやりの中をおりくる小蝶かな　紫玉

かれ芝やふみ乗よりて行蝶　白朱

芭蕉

御乃執もつらぬふ手乃菫かな　忠知

ねかへしに馬から落ぬ菫草　荷兮

わらふくのたとは沼ハ菫かな　洲水

らちそうり目乃よき洞乃菫かな　永泉

草刈て菫選出す童かな　路岩

け蝶乃とまりも残さぬあらしかな　焉遊

麦畑の人見るたびに壊れけり　杜国

ちけ山や鯖乃肴乃すゝ不　大垣　式之

ほろほろと山吹ちるか滝の音　芭蕉
松明(ﾀｲﾏﾂ)に山吹うすし夜の色　野水
山吹とてふのまぎれぬあらしかな　卜枝
一重かと山吹のぞくゆふべかな　岐阜 襟也
とくはなふて山吹のちるさくらかな　同 蓮雨
あそふともゆくともしらぬ燕かな　去来
去年の巣の土ぬりなをす燕かな　俊似
いまきたといはぬばかりの燕かな　長之
燕(ﾂﾊﾞﾒ)の巣を覗けば十ばかりかな　長虹
黄昏を手にたてゝみる燕かな　嵐障
友燕(ｾｷﾚｲ)て鳴さへいなや燕の声　旦藁
角落てやすくも見ゆる小鹿かな　蕉笠

あら濤(ﾂｹ)に寄(ﾖｲ)よする浦の塩干かな　越人
松やけもはし鉢や桃の酒　傘下
人家む舟を陸とみ塩干かな　三輪 友之
山おめる花咲かかる躑躅かな　荷兮
鵙啼やなくてさかきの花　兼呂
簾(ｶﾘ)少し上げのぼらぬ椿かな　亀洞
永き日や障子(ｼｮｳｼﾞ)跡(ﾂｼﾄ)もなくぬきさし　卜枝
永き日や池ちかき木のよりかゝる　野水
りきものあを垣から紙張しかな　同

初夏

ころもかへ人のきさハ物まれつらは　路通
更衣襟(ｴﾘ)をれかゝやたてくさす　傘下

こゝろもち刀もさしてつれ〳〵に　秋　嵐雪

肖柏老人の虫のたはひしあり山家
香炭るのをおもひけるは文臺かくれける
とて家の気に継人の来るを覚え
冬く鳴るワさの比も詩歌の中につのる
髭に焼香もあるべしころもへ　荷兮

山路にて
ありつ来ても又一り菜の一つかな　芭蕉
いちをつそ枕しなる秋かんゝきつさ　一井
捨好末乃いつも見るやちまかな　越人
切かおゆふわのさえとんおく桜かな　岐阜 不交
月見ゆるともしふねすゝぬくのみえかな　同 荻蘿

ワクすあく蚊のなしの口うつ栞かな　秀洞
めらしたるゝれとまち杉蝶かな　竹洞
ゆあびして衣をたちけり冬かな　淮句
さけ山や下ゆく水乃沢か本　夏子
上ケまらつの実移して春一種　玄賞
枯すみまさきゝとんる麦の花　竹麻
まろりて春の木のかほり林かな　竹泓
むきわしよまちて里乃娑かな　紅句
まつし芥子まちゝ色や除乃家かな　嵐雪
あるみくあつかきけしの一重かな　露枝
ろし蕣よくちるかかちちるらん　岐阜 素桃
太粒に雨こらえし芥子の花　東巡

薮いりや娵て拾ひぬ芥子の花　吉次

祢川乃鹿ふかく
菴乃秋ちらしくかゝりぬきりぐす　荒巻
さゝしにれる木々はえずかつこ鳥　形石
閑居寄

仲夏

青のりや曲てうつる雲の峰　元輔
梅井
刈艸乃ゝる夕の風ほたる哉　一髪
寒くゝき涼しき夜のほたる哉　不交
闇ぬれしきくもりし草の影　風斎
花細く追ふ川の波の星の影　素江
あぢきの夜からて白ほの雲よ　含咕
くきかつき袖の露まつる浮涼　卜枝

我涼く涼しる袖乃ほたる哉　鴎歩
きつく恐く蒲室とゝこゝれなる氏　秋芳
こゝらゝとの涼しくあやうの新緑哉　小素
坂乃出水くゝ梅乃一本乃雲かな　雪雨
ちやきたり麻木を雨くる夕かな　二水
雨乃ゝく鎗乃ゝる夕ゝ鳴坂哉　石笑
蚊乃痩さく瀧乃ゝつよとありの　胡及
落乃花をとの伴なる海士乃鬘哉　思竹
坂乃て葉乃花を白色暑さかな　風鶴
足伸ゝく姫石公抑おもひ涼み哉　出紅
竹乃子よゝ竹はけてまちりかり　幸平
笋乃時しつまりしきの竹

聞ほどぞさくてをちかき水鶏かな　此筋

あさ〳〵中に柳ぎはより出る船か　大津　一鶴

この比は小粒になりぬ五月雨　尚白

五月雨や傘につる小人雨ぞかし　㐂旧

岐阜にて
かゝり火にきざしさゝる鵜縄かな　貞室

松かゝり一本さして
おもしろうてやがてかなしき鵜舟かな　芭蕉

おもしろく
鵜のつらに篝こぼれて憐也　荷兮

は
鵜あらひ鮎も鵜のかん鵜飼舟　越人

先の世の親もかまはぬ鵜舟かな　大津　淳児

曲江に篩の浮るゝ也ふくれ　杉賀

蟷螂の巣の見えすくあるかなきか　路通

杉苗の緑とみゆる茂り哉　卜枝

虹の根とかゝれば中の標かな　舟可

蘭の花や流にをとる音の細　今

撫子や絶書人てらしん　越人

吟しや煙のこなたのあさ　荷兮

夏の日の出きしに簾の里　旦藁

巨女ツロノ了

昔の弓を
すゞつきさへ家の炭俵　其角

夕がほや秋はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉

ゆふやのさわぐハ人の立てぬし　世水

夕鳥ハ椴の唄れゆるしさふ　備呂

山路来て夕鳥のはのあふふ　津高 市柳

夕ハ風ち角夕鳥に似く衣し　孝紅

暮夏

楠も動くやくし蝉の聲　昌碧

雲の峰騰らけ涼たく句り　世水

夕ろ子テ傘めつき頃種哉　傘下

高し寸子枝もやゝ奴木陰哉　玄吉法師

涼し　さよ向雨ふるゝ入日哉　去来

簾しく涼しや宿のさゝつは　蕉亭

さき夜の涼あつさゝか哉　日

松も少の人に礫遠ろゝゝすゝし　嶋崎 妙風

夕ふ石の石部や艸の下すゝし　津高 俊似

涼しさや襟の下ゆくふゑの音　仝

挑灯のとゝてゆくし扇に来　ト救

まつしさ哉ますふてかゝる川辺哉　赤学

吹ちゝて花のゆく蓮の花　岐阜 秀正

蓮みむ日の千さゝやきハかりそ　松坂 暑凪

絵ふと見くゝかし蓮に…　古梵

河骨に花のわれれふら哉　芙私

そうくと生やゝ松の古葉哉　七社

すゝきりて蛭子の沖の清水哉　俊似

連ぶあまる待ちて結ふきゝつ　文蘭

うそく馬子のおもてるとしなれ　僚月
かけひけら海苔もて行しなれ　尚白
虫籠を放めしれよ絹ふきうれ　一髪
出ほしや幕帯と帰るさえて提灯　卜枝
麻の夜やこほれかゝるの路　越人
詞讃を後に付る名月の下　岐阜 木白長
綿乃花老母く紫に似るかな　素堂

初秋

ちかとかや麻刈あとの秋の風　越人
梢乃葉やちり行ぬる柚乃風　圓解
曇りの雲居のまるかく
一葉散音うしろもきこえし　仙化

くひなのちうらや藕の夕なりし　付斎 方生
男くさき羽織紐の手向けれ　杏雨
新白の浴衣をぬきうつる　芭蕉
草やかれの道乃をはとくる　文鱗
あさかれの向きハ元気かなくねし　荷兮

子を守るかの上のひし柏乃白に寄りて

名もなきとゝの子をやたかふとまる　同
降る寒あさるほ行ようしかり　路岩
あさかれやびくしの水に轉る月　胡及
葉より葉に物いふかるの音　荊径
桔風や立てまのうすし泣ぬらん　去来
涼しさを夜より詞鱸かな　晶長

畦(ウネ)の上に萩咲こぼるいなごかな　鷺汀
はつ山ハ通る跡より啼にけり　一髪
きりくす粉ぬかに落て啼にけり　赤秋
あの雲ハ稲つまをまつたより哉　芭蕉
いなつまやきのふハ東けふハ西　其角
ふまれても猶うつくしや萩の花　亘泉
ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉
棚作ルもまださみしき蒲萄(ブドウ)哉　作者不知
艸わかくかくれぬも萩の花野哉　伏見 任口
さえんきりく鴈鴈でおくる薄哉　荷兮
行人や嫗まねかん花薄　胡及
宗祇法師のまねをして

名もしらぬ小草花さく野菊哉　素堂
とうしみの根にさくすゝき哉　俊似

仲秋

かれ朶(エダ)に鳥のとまりけり秋の暮　芭蕉
つくつくと絵を見る秋の扇哉　加賀 小春
谷川や茶袋そゝく秋の暮　津国 益音
石切の音もしづまる秋のくれ　兼下
谷の戸や蟷螂出る秋の暮　卜枝
森乃主ハ人の声なき夕哉　一髪
田ゝ畑は稲かりしまひの出来秋哉　伊勢 一泉
山錦ゝ兼行る紅葉哉　亨子
紅葉にハたかをしへける酒の間　其角

さしぬきて物のてらへる紅葉かな　東順

藪なかの月よ紅葉ちりかゝる枝かな　林斧

とゝのふる地にちる萩の花かな　越知

けふ宿もとゝはる秋の客かな　宗和

いふ家の庵にまかりられしに

馳走せん我なり秋とおもふらん　加賀　小春

素堂へまかりて

そのまゝの実のめつらしき蓮の咲く　越人

一本の芦の穂瘦しみちくさ　防川

萩の葉にぬれてとぶかや秋の蝶　亦求

さうとして稲とり入ぬ庭の露　胡及

人よりもかくらぬ市の?きあはれ　晩稲

関乃素牛にあふて

さぞ砧孫六やしき志津屋敷　其角

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊かつま　芭蕉

いそかしや沖の時雨の真帆片帆　加賀　一笑

暮秋

あさよさに撫しつ葉の宿かな　巴丈

ちる葉ちもあれてみにかしき　昌碧

山路のきく野菊とも又ちかひけり　越人

一葉や作る菓の?作さくり　晩稲

荷兮か室に旅ねする朝

よくよく君か?

かはらけのまきちらしたや菊の花　其角

菊乃つゆ潤る人や螽斯　同

ふくかけて菊作りわかひけり　二水

かふらして着たる人まれの時雨かな　伊藤　千閑

淋しさや櫨の実落るねざめかな　濃州　芦夕

飛る鷺ものこゝろにかれや枯尾花　加生

芦の穂やよのくさきちるあられ　許通

初冬

あら美つちのそばしらふ時雨哉　[illegible]

京なる人のもとへつかはし侍る

一夜寝てこゝ拝するやこゝに初しぐれ　尚白

きくさしれ何柄出尽こその夕　端水

万句興行の時

ゑしやうする人の宮も叢雨か　荷兮

人を待ころや年

ちる桜はなのこぼるゝしぐれかな　落梧

酒の香のあかりのこゝろしぐれかな　牧童

懐し守とり篝見るしぐれかな　傘下

こがらし子二日の月の吹きちるか　荷兮

一抱の柿の木ふるう旅寝かな　一髪

このごろは淋しき冊霜かな　同

枇杷の花人のつれなき時雨かな　同

たそれむはあのつめたさてるか　李泉

松笠の紅葉ちりかゝる淋し　舟泉

蕣乃いつちらんるや帰り花　昌碧
きまおきく音驚かし菴かな　令
乃とりしや重なかくせの衣かへ　一井
碪ありの紙帳くみよくある蟷螂かな　落梧
石臼乃飛行くおしやつての花　胡及
まつくともとくさい分きのみ㔟かな　文鱗
あやしきは詞飾まうる蕣しれ　卜枝
分き枯子風乃体こもうすき哉かな　洞竜
蓮池かんうちはへ中る枯葉かな　一髪
瘤きよ垂石きつまつてかれ哉かな　松芳
こかしよ吹きこもしりう磬の巾　杏雨
瘤き枯れ路よ聞きまる茸かな　蕉笠

十二月

鵜と出く（なく月を雨もす　世求
あさ漬乃大根かふ月夜かな　俊似

仲冬

村々し柳く浦に舟あまあられかな　津島 勝吉
隣くはしく取つみてたらぬ霜かな　津島 文流
楼上おちくる雲雀まし凍ぬかな　林塊
蕣乃花とほく子丸にあふれかな　夷雨
いよく行く出中の花あらせかな　宗之
家乃軒せんなんの実のこぼれけり　杜風
衫綱乃葉打ちてんてちぬれ　勝吉
浮き池水乃さま取きりけり　俊似

塩木ハ
焼焚薪カ

つきバやられてまんの窓のきじりけり薄氷　雄風

おれかゝて行きまじる氷柱(ツララ)かな　亦丹

兼題ニ雪舟

峠より雪舟(ソリ)のはこぶや塩木かな　芦原

ぬけ道と雪舟にまかするくさかな　荷兮

旅人をこかして雪舟にまかせけるかな　其紅

高登より雪舟に出しや軒すか　一井

雪舟引や使ひも彭子いそがしき　亀洞

つりかけて行くや雪舟のゆるきかな　含咕

青海や羽白黒鴨ならびけら　島原ノ忠知

雪舟にて出る手綱かな猟かな　亀洞

餅鮮(テイリセン)とってかゝるもあるらん衣手ぬる　村俊

井とるものは六十六月ありて
赤はく男カハみて褫(ツ)けり　文松

行列に谷の子窓に氷室(ムロ)かな　利重

海苔紙の壺(ツボ)ぬれ酒氷茹(ヒ)かな　亀洞

岸に蜜柑の完熟さかりけり　塚卑

瞭然とはく納んとして出る雪かな　一示

出とけ出て米ありて黒み種かな　亀洞

コレニハ ユカミ庇下
いつこにも庇(ヒサシ)の雪は見えるまし　芭蕉

手を袖にまるしよりてかんばせしらり

歳莫

餅つきや門に松かれ福らして　由之

昔おさく炊き物なり年のくれ　尚白

餅花ハ佛ニ供スル花餅ナリ
もち花の髪にさしてちらぬかな　雁岳
さる近く椿つぼゆる菜畑かな　亀洞
餅をしれ独あそぶる鄙かな　一髪

杼トチ

木曽の内まくらする人のみやげとて杼の実ひとつおくらるゝ年のくれに
としの杼の実一つころくころ
のすゑもじうにふりにかすりみせむとて　荷兮
門裏誠うとして拾一ト荷かな　同
田作に氣ぬ延ふとのさきかな　舟泉

雑

年中行事内十二句

供膳籍白散
いちはやとて家ねる人かな　荷兮
もとにゝる蓮の葉の宿にかな
在清水臨時祭
水番も立つまかりんさわぎかな
灌佛
すなはやつゝいて浣佛達
端午
粽解く葵付たる髪のいし
施米
うち咽く行しほ米をまきけき

乞巧奠(キツカウテン)

かゝみよし七夕まつりみえよき

瓜盤も錦乃すゞしやこゑの音

狗迎に

羊の皮や星乃おもかげのきまり

撰絲(ケンシ)

十月更衣

判きれ衣かへしやうの花

五節

舞姫之第ふ仙指を折てまつり

遊之闘

打払ひてや眼まなこまる思の面

詩題十六句　野水

人ゝ不知計含春風吹水一時來

流れ淙ゝと流るゝ春乃風

白片落梅浮澗水二

落ちられしに付る梅白し

春來無伴閑遊少シ

花吹にまかせのまゝにし尋ぬる旅

花下忘ㇾ帰テ因ㇾ美景二

麻ひなくとの川まかせよ花の下

留春春不留春帰テ人寂寞

汲むこころへほ乃叶ふるれ

厭(ケ)ㇾ風吹(キ)扶衣不ㇾ定渡不ㇾ契

綿脛をおく乗字そはらいこさう
池畔人蓮苛謝
蓮乃香も則かれてゐるさなめり
暑月貪凉何処有 客床唯縮北窓風
凉しさよ切ぬきたりし北乃まど
大底四時心惣苦 就中断腸是秋天
なきの涙も逝てもくはらし秋乃空
秋風細雨後 秋気颯秋々
秋乃雨さみしくならふ人もなし
遥入瀟湘秋夜長 眺平沙欲曙天
雁とまつりさらへて唐かまき
残景紛閑猫斜光風穿牖

独り寝や泣ける虫の音まま有
万物秋来能懐色
虫の音や素秋て人を之と秋乃来
十月江南天気好 可憐冬景似春華
こがらしも来てくし鳴るつく小春かな
寂寞渓村夜 残雁雪中聞
淋しきに出もこぬけしや宿の軒
白頭老病併名纏
併名乃松子腰懐く 白髪乃松
独関乃擲ひのこし旅日しも
老となにおもしくて

鏘鏘
目立 かうらふ乃夕ははいつきつらかり 哉

杏泉

付木突(ツキ)
鈎瓶(ツルベ)縄(ナハ)打
糊賣(ノリウリ)
馬糞(バフン)掻(カキ)

ふる園に窮てらし貧しき人乃家に
かくるさへ沼のこまるは秋乃里
あさ露乃きえしわりむつかしき
こかしし乃松恋しきとつみしこそ

越人

李夫人
魂在何許香煙引到焚處
かけろふ乃抱つらしいかころもし風

楊貴妃
雲鬢半偏新睡覚花冠不整下堂
きらん風に帯ゆるさきる病気かな

昭陽人
小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

其人不見て膓突
かの数奇やたのし いまさ乃縁なん

西施
宮中拾得娥眉斉不献呉王是愛君
花ならし植てくらふ牡丹かな

王昭君
玉貌風沙勝畫圖
しの吹もまきしらぬ身の柳かな
一日留まとくをかけて

詢雪

病やの頃や杜鵑焼火を…
杜若生ん後書乃あるりかな
猶我乃眠るよつかふ扇かな

折
辰
巳

午
未
申
巳蛻
世喬
甲虫
海魚
川魚

水はなほよ藍二テ上は紫にしても　翫水

深かきまろ武蔵の夕今はるかすり

あらし雨や時とも白きちらはらり

かしこまりて生ともとゐるの紫陽花　晃竹

康は田乃上まをつらしはあはれなよ

畔蜂の竅乃ひろき長き日あし哉　含咕

枝からうしろ出うりまれ蜀淶かな　不決

乾あしろと網引ろても盆乃月　仝

秋乃宵揚川くろ火蛾ろけり　含咕

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一方もち枝さく桃乃纏系のかな　越人

蔵舟於壑蔵山於澤謂之固然而

夜半有力者負之而走

かくまりし深き乃市にうるさくハ

絵雲ヲ障テ知ル大盗ノ止ム

七夕を想ひうけしもなきしむし

鋭音夫

薮きしくはきすめハ花火かな　桂冬

蛛音

蛛の巣のかかるよし秋のかな　市山

藤斎

ほろろきは鳴子むけは去りかな　一井

膝右

うつくしくよみなす荊口小棘に　千江

紛れし一休乃眼もちれしや月乃雲　湍水

清拙

何ある乃流くろひもなきさつる水　蕉陸

山岩

ゆく山ハ霧子減るか岩乃角　湍水

海岩

苔もとし浪をえもおりつゝ　仝

名所

ハきらすゝ園にし見ては新田代　杜水

——奥乃嶺や式部乃衣山　蕉谷

辛崎乃松ハ花より朧にて　芭蕉

筆一把ふゝて花ぞんとる汲来　湍水

嵯峨隠くとえ見るるあ伊あ遠望　蕉谷

琵琶橋眺望

天や躍る思擬さむまて浮生乃舟　含咕

関あうて宿も花しくみさらか　宗祇法眼

尾張國関とい小乃山も花乃

咲るとさく吟しかたや

苫舟出し布子著たりし更衣　杜國

青うんや門おもちかき蓋笠のさと　宇文

五月雨かくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖乃水まさりけり五月雨　去来

牛もなしくる稲のあかりの出月かな　一雪

角田川にて

いさのほれ流浪乃鉄合はまる　貞室

みよしのゝいつに秋立見乃ゐる　休笠

いさよひもまたさしかの郎が　芭蕉

夕月や杖をもたぬ角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらはけふの月もみよ　素堂

明空なりてるを見るらん稲田かな　胡及

明実ら首ゝ湖の名月のむかし哉　渕文

武蔵野やいく不ふもうる射ての　永泉

湖を在稲かりてみん村しくれ　尚白

かり清やと月あかし大井川　伊勢　涼友

むさし野ゝ稲やいとみまのはあかし　洗悪

先つかしてほはあ半乳と姥やらかの奥　後似

みすゝまれの猫蝉蠅やそのまゝ　洋烏　一笑

雲の富士芝第一つゝかられけり　端水

今し世山も恨大名の夕かな　世水

寒清のふるしとくれとも鳴子かな　芭蕉

稲ゐる乃名や石綾の小宗乃稲麻　如行

猿

雪出はりも上々やからよ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

猫乃須磯子かゝる猿ゐかな　仝

桜咲く里は賑はしく通りけり　夕楓

日乃入や、あかるさへ桃乃花　一鷺

のどかしや漆(ニシト)乃色乃はれやかな　荷兮

出から稼ぐうしろにむかしぬなく　芭蕉

ある人乃餞別に

わすれきん隠れてゆく空けり　涼風

森りしめる金(?)雑を打て暁やむき　丹松

蝉ところどころに蛉鳴る旅宿かな　昌碧

あつ雨や桂月と出れ市乃あれ　杉芳

夕立ぞその灯れる一声は梨　傘下

芭蕉まくを送る

編笠みきしまつきせる別れ哉　泊老

なきくて袂(タモト)にすゞしは秋の蝉　一舟

あき風にやゝ心よる小萩哉　丹女

揺りきし芒まく秋の野かぜ　丹泳

まがきなくするどに松の枝くさめさし　嵐竹

さびしさに揺りくてあむらはく

立秋乃月に二人の人ぞかれけり　荷兮

越人旅立けるまし出てうに合つかし女

月出て脛折つきも見る乃うへ　丹五

松とつれつ松くりつきてより木葉乃秋　芭蕉

路乃栄枝出てわかりけり秋のいぶ　路通

松茸摘むかの其南乃そかぬか

に松く暮れよくて

拵升桶に鹿をあつめし秋乃山　荷兮

とゆりし稲かけおもひやりけり　京　ちる

入月の今ぞこし切ともろうが　玄察

能きけく親常にうちきあはしが　一井

品川にて人にわかるとて

澤庵の墓ある寺乃秋乃暮　文鱗

艸枕犬もしくるゝか夜乃聲　芭蕉

旅ねよしぬ力いつや村しくれ　津島　常秀

鳴海にて芭蕉子に逢て

いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮

こゝろみの羽織を綿の入まゐら　野水

其角子にわかるゝ時。

あかつきの明ぼのになるおぼろかな　荷兮

天龍のこゝろかはるる夕あらし哉　越人

かゝる藻のつるにかゝるゆく手かな　傘下

里人のわたり候かはしの霜　宗因

越人と吉田の驛にて

さむけれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅ねして見しや浮世の煤拂　同

述懐

艸菴を捨て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也　路通

子を獨(ヒトリ)守りて田村が嫗(ヤモメ)が非　扶宣

余所乃田乃蛙入ぬも浮世哉　落梧

こゝろ揚やく
菖蒲はなぶさ眠らす奥乃院　杜国
擬らくくはあらりするに今は代　樵舌

高野にて
父母乃しきりに恋し雉子の声　芭蕉
あやめ生ひ出し軒きへのついでに　荷兮
さゝふ入深山かふひらり　一下盤　同
一下子乃ならてひもあまはほかに　青雨
扇には鹿子よりてゆらせを乃衣　杉風
仏にこくしや白粉かつく麻衣　重納
九りなら高雲乃良門なく
かふ水家やよ久葉乃中に然る葉　嵐吉

うき家に節つるきしの頭穂かな　晩鶴
ムカいらせを行く
さ行てもあれは花よりおもれの白　芭蕉
旧里の人におくられ
こかし乃ぼろ葉をやふる山の紙　杜国
藻塩達長ふこまれて
荷でくあちはかねてやら
あるゝのかよろんよや上て荷茶を　越人
一葉きれし秋て
あきれかお荷葉に嬉や出さよう　荷兮
古乃ゝのおぼえ出る此んだ
牛いわね乃暁角や冷ん鏡の声　嵐雪

稽乃ゆふに錺のうちされし寝時代　去来
月や遠ざかる耳もちらほらはしの音　西武
婦るふりや瞭乃濃き年乃善や　芭蕉
さ消し乃子しを行か年の茶や　陰風
老とまされし繁冬子拘とるよ
行く年や家にも今とかくしなり　越人
玄ん
まつ乃雪とふかゝる人乃素顔かな　伊勢 一有妻
きぬくや余乃をとろけも時ゆる　除風
跡を出ていきかはふる別かな　木紅
むし干乃月に立し枕かへる都　文鳥
虫干に小袖並べる女かな　紗文

さゞけかし妹か垣根の菜の花り　心梅
しんみ粉絲無幾彭
十五夜乃稲妻消出て月乃影　長虹
一段しくも人跡うあまれとなり　尚白
きなし支折る
つま折しと家をはしむかし世帯花　荷兮
きつともかうゞ落る鳴るつまもりや　小春
妻乃名乃あふれし枕ふ秋送り　越人
松乃雪明なし読乃くさなり　俊似
花見るし火燵を明てしいかならむ　氷泉
うくかねに火燵出る別れ哉　嵐蘭
山畑すかみなくも夢見る　松芳

きゆくと数見くらして廟かな　　ゑりわ

ねころしやきゆく所は涅槃なき　　昌碧

無常

末期に

散る花と角田河の涅槃仏と見ん　　守武

咲つ散つ世の中ちらきりの鼻　　集下

末期に

角田や空さえ月乃ほとゝぎす　　堺　之順

松坂乃涅槃といふ人の名あり
もろいひやうなる
備前かほり涅槃あらはる也　　蕉々

いわうとの涅槃年
手乃うへにかゐしく消る雪かな　　京　去来

ある人子うしなひける時
あはれ夜の小蝶とみえぬ涅槃かな　　露々

世とてかへし其月わすれかね
三十
秋さ月乃桐乃一葉とさへかへし　　北水

辞世

あくれし蝶せ世一つはさこ衛
子ヲとらはるゝ比　　人谷

何れ親乃あはれ世くらん一躍り
一原此部にて　　広梧

もく涅槃や小町が月乃夢のさま　　治也

妻乃返ゑれ

ときは一しきその里人をかしみむ　自悦

李下の妻乃このまくしとはこて

秋の暮行や何ゐへ云ゑ小ぬか也　去来

コ斎身まかりし頃

そのくちも鬢さへ形し秋乃くれ　其角

母を都へやりける子乃家にて

折さみしやしちうきに秋乃暮　尚白

ある人乃追善に

埋火もきゆや泪乃にえる音　芭蕉

猿子てみまかりけるに

あら雪のしくのようらに法なかり　嵐蘭

鳥辺野へかゝりしやを師乃あとをしたひて　加賀　小春

釋教

伊勢にて

神垣や思ひもかけず涅槃像　芭蕉

負てくる母をかゝりて[illegible]涅槃像　嵐蘭

西行上人五百年忌に

ありきやとその月[illegible]るさかえへ　荷兮

連翹や手もきしつにほふ小祭　胡及

折ふし遠忌に

うて前の傳乃軍ひく仏二三式　杉芳

彩鐘そく僧もきえゆり雨の花　杜国

法の宮で花を翁てかしく花乃友　冬松

花よ酒侘しくも住ん桜さくら 其角

貞享つちのへ辰の年八月生一日
東照宮の別当僧正の北房に遊
名所近在残す法華八講の後ら
らしきる所の名残にも離すまでて
廣田のこゝろは
散る花の情いふにむかしをかけてり 越人

女房の腰守ひとりそへて北の御簾
出れば鳴るき新女房の
袖の香てきのひとあらぬ花か山声の
ほとゝぎす 同

ほうろくと啼る浪や鳥の声
絵ある扇上の桜咲にけり 俊似

ヒ千リハ京和山ヨリ出テ商家ヲメタル僧ニ今世ハ止

古寺や法ある音の菫草 一井

八島にて
海士の家聖まで山に法生代 伊勢 千閣

咲つゝむりかへんふ寺見つし牡丹 一井

雪山やまだ残しの江湖新 蕪葉

京にて
儒僧の母生れ遠る奈の子かな 芭蕉

涅仏の言ぬ涅し吉のかな 尚白

ある船にて
腰のあふきしれ茶の旅かな 一音

鉢手向く菴の白の清水かな 加賀 一笑

十如是

わかみの流れて通るしくれかは　荷兮

即身即佛

衣装の身を添ふらんの御佛は　思益

ほころびや僧の緒わるゝ衣　嵐蘭

わるくせや門めてあちらく施餓鬼棚　荷兮

わたけの火をとるむしのちりすまし　撰丸

石龍をはじめて見る棚のふくれさ　文里

還俗の身よりの涙と向ひけり　亀洞

わかれ身の道のとゞまる牡丹かな　卜枝

摂待のうらみはるゝ雲の後　冶天

平等施一切

摂待にもてなし人の見てとをり　俊似

稲妻に大佛拝む野中かな　荷兮

須越上ノ遊び取りし夜半かな　卜枝

あるべく所の里帰に水鶏と鵜不食不閑と心を感じて

あはれをしるく

あるくも人の御ぬけの浮きあそて　荷兮

あるゝ乃夜川に

燃も渡る乃鼓かつりうて　其角

もどりし坊主わし夜月乃出　一井

流乃手にわたる法流に

人のかゝるあるてくる山なし　卜枝

かるかまうこされたれて

ゐなうて又くれしうり一时包　嵐雪

謙倉乃安国論きゝて

ほとゝぎす法や直子ゆるさん　越人

古寺乃なや

曙や伽藍し一乃宮へ迎ひ　荷兮

同

妻あれやうる二王乃片腕　俊似

つくりかさくこいさ小もち一宮仏　一井

知康する人のさかさや跡さき　文閑

千鍛かゝるしかせり一寸のくれ　其角

藻き品七句

如寒者得火

まつ白き山の咲てるさくら　胡及

如裸者得衣

竹乃ほや酒指捨子あまの家

如商人得主

双なかの乃ひてもむこむつかしさ　徽雨

如子得母

竹とりかけとりつくすつけ　小豆

如渡得舩

月乃汁清乃板木きくさくら

如病得醫

かくとき浮氷えある山さくら

如暗得燈

秋乃夜やねびゆくしきみ起さるゝ

古ゝやをとまるゝ獅子頭　鈞壱

神祇

二月ともなる背納子

ゆきしきや雲井乃月乃梅　荷兮

ちんくと梅ちりかゝる庭火かな　同

掌も我あらてこと神乃梅　嵐洞

上下乃さゝしぬやうに神乃梅　呂望

炒かかてるかくうく梅乃中　釣壱

何しゃなれちを古乃梅の花　越人

ゆくおしあら田てさる神乃梅　亦永

臘八や祥也ともるものや梅乃宮　雨桐

門あけて梅乃瑞籬にゝうくり　言音

徐孫乃人乃後乃さかりかな　玄宗

花をみるく遠眼もやまるゝ袂　浪水

玄乃御川候ゆくるさかりかな　卯杯

水に流る乃参籠乃中の燈明かな　如采

行きくれ卯花乃中を通りけり　玄寄

清ち乃灯とりて大串かな　亀洞

破扇一五ふくれ清き祓かな　永学

川ぶち進み綾まきゐうたれ祓かな　荷兮

こかしや里乃子詣く神楽哉　尚白

此月乃おゝひ深くころひきりんは　松芳

みくさしや禰宜乃さなる池筒　旅梧

若ゑびす個

きゝこゝぬるも嬉し神のこゑ　利重

初乃方藤ちそん旅の神あそび　此水

深初川柳烟乃福なる神あそび　昌碧

かつきみ神うらふつき色光　村俊

桜花や森桜の蝶もし　卜枝

祝

肩付らしくようありぬ出来し　如文

若分ヶ早乃春

米蔵も竹を御代見ゆるかな　重本

君か代やとくとも寄まつき　越人

東寺ら行るを見れ件乃石　傘下

いきうる月乃上子秋つかん　亀洞

千代乃秋にわらきこえしこま粉　同

老をしかたかふる人の中に来ぬ

先祝く栽代乃千代の難しき　芭蕉

曠野員外

誰か花をわすれさらむ市中

にありて朝のけしきをしらずあれは東

四明の麓にすみて花のこゝろをしられ

ともしれなりて佃川田をたついのすみの山

あさがほしとゐるかと実まくらすの又

事をしし席をとゝへといふべし

此句は湯乃水子乃役して芭蕉

翁の傍しとなをりけはしたまふ

比雨折く居をうつして実果ぬ句を

感じてむらしおきくしみる人乃事

に虎乃毛流をしらそう逃されたる人

擇不居仁何得知

よしの山花咲けるの
新むし
人にしらぬ春の
あはれ

君が鏡蓋飾

ありて粧色は露をしるよし誰乃

相手へうるさゝうらんたのかくし猿は

皆と実まわるこゑ声乃なかるとよる

も実乃字老杜乃ここちなるとも

粧唇の句とならひく

表とわらはれ等身におまかせぬ唇際し

この文人乃手つかりしとふけゐれ

しとこ人間を叙存も吟しく

手とさし勿せん筆乃らけらふ

語乃露も去とらすまぬ乃時く

古乃志つかへは花とし米さう

門乃名内得閑乃下出ありのか

册水

荷兮

越人

水

ヲトナシクハナレテツク

風乃目利を初秋乃雲
武士乃商ひ山にわけ近し
まとりまついて戦乃噂高
袋より注を出る字乃うへ
はふりし清ふりてさる処し雨
立ちくる松街来まる店乃端
手向いし奈良小山乃てら
経さわる一字経に噂録く
あてよらもなきる月秋ら剣
云浪乃身かは流乃空へ命ある抱とら
秋は奈をあく次第人乃妻
唱るゆき西も東も譲乃声

兮人紀兮人紀兮人紀兮人水

一旦随八大公時代小性好人之

まふりなりける利根乃川ふ
ナヲ
みさかる目乃てらしもしてかき暑さ
ふるゆりけし相縁うらえて
ふししときめふ乃市の境いなき
拡つきとや人乃くらし飛
拍木乃脚気乃はかつくらと
さやくこしのまかけえつる
月乃秋とら会まりけしわ撲
秋ふなるより思乃酒桶
カチ
京お志くられ歩 [illegible] 出る音をけて
うわしきのふ石街乃萬紀
かしこまる諫ふ浮こほまり [illegible]

兮人水兮人紀兮人紀兮人紀

火炎のをさめて手乃あつきし　亐
ナウ
かくれなの尺よとくの立かを　人
我やまし と見てく 池乃かヽて鴛　水
花さく茶劉杏はいもし宝らん　亐
擲らし売好るなわ堪ちも杉　人
里ちも外らを西角をにいぬれて　水
吉根きさう〳〵テにいそう　亐
遠床や伝ふ去年きん瑚とも　斎
はるれ乗るふ酒乃もき里　荷兮
のしるし盃をき凍ふ気と解て　昌碧
両所に思ひ乃欄る葉さきりわ　卅水

升ヨリ雪

ウ
夕月乃雲乃宮をとうち詠　亐水
[illegible]と乃髭と裾ふ引まセ　昀嵓
[illegible]の[illegible]とよもふあ[illegible]や　亐
一[illegible]して[illegible]古　綿　斎
[illegible]乃[illegible]森　荷兮
[illegible]　昌碧
[illegible]蔵造　昀嵓
[illegible]乃織[illegible]　亐氷
[illegible]や[illegible]月　卅水
秋風[illegible]乃[illegible]　荷兮
[illegible]法輪　斎
[illegible]　昀嵓

はくよがめさくらちらぬ花のまへ　昌碧
八重山吹ハちりかゝるとし　野水
日のいでやしろハ紅らん暁よ　舟泉
かゝやけふおこし始る利　亀洞
向ふて窓（ツキ）やるそれの小ぐちして　荷兮
振袖きたる人の着（キル）まの折箱　昌碧
死ふして干魚の切蔵さしえつく　鴎歩
寒かしふうるあるの折れぐ　舟泉
むく起て袖いひつらく赤腕を　野水
門とるゝ坊ありなれども　荷兮
いとこゝらゝ足揃所の萩流し　亀洞
杉母の逢ありそれもさる肉紙　鴎歩

盃もわるゝまゝりの下戸の月　昌碧
やゝさむ秋のそらあらそふは　野水
ナウ
つくらしもわらいぞ帰る寮（リヤウ）の窓　舟泉
ありさまを田舎安房の小湊　亀洞
まのあやなくるゝ流の習ひて　荷兮
桶のかつき（名カイ）と入しまひたり　昌碧
くらまき鴈鳴さしてむまれ　鴎歩
ついらつかまに慕る糟追　野水
苦しき鯰（ドキヤウ）うきとる重の氷　舟泉
柝のうゝのかまきりの鉾卯　雲苔
夕暮の灯揚とりもてなさん　冬文

竹トリ物語ニ カノオヒノ無デアリ

ウ

きりぎりすやうつよみゆる月影 荷兮

秋草のとてもかうきに咲みだれ 松芳

弓ひきたらぬ勝手撲なく 舟泉

ゆふかほの拾はむとてら出る 荷兮

あるゝく池の中の赤さし 冬文

火燵の埃の立はきく 舟泉

涙ぐみ諦しとつら終日つく 松芳

ならひたる祭踏もしてて務まる 冬文

泥の中ふ招かちてゐる 荷兮

我年雨晴れもせん殊剃きき 松芳

よみて双多の檜紙先よまる 舟泉

柱の上のもう声かふる花の色 荷兮

泉州堺之人 顕本寺ノ僧 法花宗歌人 節ヲ訊出ス

泉南古人ノ事 [illegible]

月の衛や飛鳥(アスカ)井の森(キミ) 冬文

竹にまかれなひつしまる凡風 舟泉

珠珠らうけく 雅影(ソウ)のうへ 松芳

遙辰(リウタツ)か入道子弟のちつかなく 冬文

十日のきくの松しまふるもし 荷兮

山里の秋ぎらしと生鱸 松芳

本栢かしりへうるやとさむ 舟泉

さらくとふうれ紙渡る月の秋 荷兮

馬のよくあれしるのいかく 冬文

さむしさらに薬井の古何の刃雨 舟泉

慈悲まへく 蓋高の夷あふいふ由 松芳

つくゆい濡きる殿のしらなく 冬文

浜宕倶手り

ナウ

蛙ふく〳〵撥婆娑上む　荷兮
けしの花とりなをされぬなまめかしさ　松芳
味噌するとしの暮さハうし　舟泉
芸鳥の門さゝげ藪ろ　荷兮
法すし〳〵まあとしうふなれ　冬文
素の紙奈良見えなきさく(ママ)あり髭　舟泉
顔みなもしるる古北く誰ぞ　松芳
ききうきや瀑とわひ(ママ)を敬とこめて　冬文
ことう面白き山に乃家　荷兮
わくきし(ママ)ゆるぬくの托もあり　荷兮
雨のくらき禁うちてる戸の口　埜水

六

月すてし車ハ頭陀の袋をまきて　同
あふさか(ママ)くもくのうらがひ　荷兮
月の秋(ママ)旅のまくらにうつるし　同
一ッ行のかぶし〳〵てのきくらけ　埜水

ウ

初あらしかつせ(ママ)れ寮の坊主　水
菜畑ふむなしとゝとりくりふり　兮
土肥は多し〳〵まかきよ柴をく　兮
不剃むりには神そ抽う外　水
邂逅路のつい(ママ)きうこけて近いの　兮
立信ふあり〳〵恋のうくきは　兮
代よりなをやらくしと清れのさ　兮
残一冊写子鏡一節〳〵　水

月乃秋営はよいとくらべ下
花咲けりとくらまおかし釈
天仙蓼子冷かあさし来の墨
あけるのうけよ窗緑乃中
たゝんとあけてえ袖うらことて
みせかけしき隔ついてやる
駒乃やと晒白ふ傍流をふ中慶
秋乃あつしき昔濘隔濁
紅そるくしよそれ手乃し生尺魂
八日九月乃えてきしといるまるく
山乃端よ松とし挑とめのるちる
ミつきるるそこまろくとする

今　兮　今　水　今　兮　水　兮　水　兮　水　兮

黒きし夕や独り汁引むすん
太鼓たゝきしよ潮知のかるゝ
ころしと森ゐる木賃乃料松
気たてたのとききと鯰まるん
母ても去ふある若ふて一二年
庇とつゝく往済りし黒あか
こゝろ乃ねむつりしと大まくづる
供御乃料鞋をどくくときてく
傍くや小梅太京咲咲乃花
人ともひみれはる乃川　山丹

今　系　兮　水　今　ゲ　今　系　今　手

月さしのかるゝ九丈八宣乃里も面く雪

おもしろさに柄でさしこんでハよきし閑やさ
宗鑑法師乃句にすがりし出る夜乃
夜乃痴とハふなつかしきやまひつきぬ
月に柄をさしたらハよき団扇
蚊乃おるさハり夜の蚊の床 越人
とらら代謝か赤かくこるよん 傘下
おも母ひか丸きしうせ蛸きしの穴 同
きらふ柾つかへおきくさらかな 人
使乃者に返るのまち立てあれ 同
あれこれと猫乃愚鈍者と遊ぶさまよ 季
としいらるまそて行ふくしろう 下
ととてやらすの筋ミせて抽るは 同

鶴江

まことにもけに鯖なかれ白鰈 人
大路乃人にほ蓮華をこぼれて 同
月乃夕に釣瓶縄う 下
登ふ柿もよろふきもお渋し 同
秋乃さしきれ畑みる 人
けらおもいつか世は皆くへき 同
麻ふらし舞からの夜のゆか戸 下
花乃盛さらへよりふる浪浴つ 同
さもあし翻乃こきさ春風 人
うら祥て浦乃若乃塩汀よ 同
門へまらりてなおゆる 犬 下
砕さ炎のおこの鉄さきにあれせ 同

掲古ジヤウ尊者
鎌着正法師
三郎人なり

よもつらかる雨乃後生し　人
歎今猶羅漢おいくろく　は
まろは鈍訴乃うかちらはるり　下
蜥蜴乃池こやして押くし　日
白とたこともさきりくて沁　人
ふく風にまのこらつ茸のぶらくと　日
半ハこきん箭やさしく秋　下
むつくと肖るる春の翁に似て　日
人の謗おふるかりこともなし　人
にきハしく瓜や茸とおひ込　下
手をは早乃ころかし町中　人
松くくと小諸乃君の昼時分　下

芭蕉ハツトトニ

百万ハ狂ひ女也
老楽天台ノ
アキハ松葉ノ
又菜ノ

皆日吉るよ十念佛　人
百万もくるひ所よ花盛　下
田楽きうく流れしまよ　人

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪乃大きさ五石ばかりなり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
ウ
なに事も長安は是名利の地　仝

春秋ナカメテ暮ル

医乃おほきこそ目くるほしけれ　越人

いそかしと師走の空に立出て　芭蕉

ひとり世話やく寺乃跡とり　越人

此里に古き玄番の名をつたへ　芭蕉

足駄はかせぬ雨乃あけほの　越人

きぬきぬやあまりかほそくあてやかに　芭蕉

かせひきたまふ声のうつくし　越人

手もつかす昼の御膳もすへりきぬ　芭蕉

物いそくさき舟路なりけり　越人

月と花比良の高ねを北にして　芭蕉

ナオ
雲雀さえつるころの肌ぬき　越人

破れ戸の釘うち付る春の末　仝

そゝろはすひしきるのひき臼　蕉

家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人

法坐
ものおもひゐる神子の物いひ　蕉

人去ていまた御坐の匂ひける　人

祈恋
初はせにこもる堂乃片隅　蕉

ほとゝきす鼠のあるゝ最中に　人

垣穂のさゝけ露はこほれて　蕉

あやにくに煩ふ妹か夕なかめ　人

あの雲はたか泪つゝむそ　蕉

山路の行月ハうはの空にて消ぬへき
ゆく月のうへの空にて消さうに　人

砧も遠く鞍にいねふり　蕉

ナウ
秋の田をからせぬ公事の長ひきて　人

嵬ノ貝（イカメシハ）

さいくかうし文字面ふくる　蕉

いろかしく尾花の末葉や　人

孫きせる子乃痩てらひらき　蕉

むの比漢栽糸かもうらやまし　人

田かしとらうく臓きらち　其

一越ハ中

翁ニ倣ちれて味ふ人の笑つくさるに　其角

落汁ざも荒つま落乃の文や天津汁　越人

三夜廿ノ月ニ雲カヽリナリ

三ノ職さの月見ふもふかうり　仝

菊萩の夜さ寒てをりつりて　角

論らいらゝしい茶らぬまちかる　仝

頃の月らくくく襟まうけする夜衣

ウ

進ぎちゝりまさくへにつらつなのる　人

眠かる流まふしりまなりて　仝

静御前が子の舞をさらる山る　角

空蝉の魂の影乃ねとはよ　仝

あしちゝりかる今二つ万あ　人

いらおしきゝ子と他人も名付けら　仝

やけともとしてんしつきよる　角

湯熟寺耳さつきゝうるさ地とと　仝

魚へともつゝぬ月のにの年　人

そ以いろの宮士は浅茅か秋の暮　仝

流をさしかゝる草乃一瓶　角

饅頭をうらしさ袖よつゝゝる　仝

アーチキナシハ無益ノ者

不断桜ハ四季ニ咲ク今ハ田舎ニモ植ル

平家都遷リ

うき世につけて死なぬ人は抔

西に東に鐘も聞ゆれ

よしや鶺鴒の哥乃たえまし

官女トシテ

あちきなや三味ひきならす朝寒

秋の霰ふらし嵐のよふかくのまん

やくなる松の庭もしねらはれて

米つくおとは師走近しらり

夕飯に紫蘇も手まは鴬の声

いくつの笠と菊に解

ひらひらと雪うらさらひ州の桃

ひいかつきりて伊勢の八朔

満月に不断さくらと詠めさや

人 仝 角 仝 人 仝 角 仝

念シヤ 子ニ志シコロヌル 住主ナリ

念者法師は秋のあはれせ

妙にも又おもうちしき香子

うらなびする寓あけのおもと

たちうすれ会の鐘守けぬいて

かのきちろ馬士の風より

花の香にあきつき勝りし

むしろおへき鯨漬の声

尾州ナルミニアル浄名之

あかちしと新酒ハ人の酒やまき

秋うちそしいつも涙

祠の中の書をとりちらし給ひて

あ西の草の草ちけに

那

人 仝 角 仝 人 仝 仝

嵐雪 越人 仝 其角

さら〳〵あびて枚まじらぬ里のつる
川越して行し塔下のみち
疱瘡の迹さへとる行し道の
唱哥ばさゝれし声かそり寄
ふる〳〵ゆかれしのうきそぞろ
泣そひよくとしふうらきなき
を親よりも泣あるまる坊さゞなき
行燈そらして加へる泣人
葬れんと灌みうそしと一ッ暁
恨日たち惣ろれる尾の月夜
去る〳〵宮の経て泣ぬる女客
つきあふの医者乃後姿や

仝 人 仝 兮 同 越 人 荷 兮 越 人 兮

ちる花は日はくるれども長咄
きぶこゑるハ何をとうらん 越人
初瓜やこゝしのひかる桐の木に 野水
日のみどりきし花乃紅 落梧
山川や橋の谷あのとぎされん 仝
綿を遠かへるへりろゝて 荷兮
松ぶきよ押合月よ萱非行 同
あし〳〵し長堤の萩 落梧
ウ
川越乃歩みさきれ行秋の雨 水
ねかし痛る熱のきうゝふ来 梧
わかせこ比ゆくかくれ縁の下 水

はかなきおもふ世乃うき〻ひ
えつる瓶乃湯をむつしと水飲て
これらりはなれ候はゞ猪
峯乃雲おちにあらりとてんせて
猿もあれうちのゝ若龍さ
京ぶにむ子ふすれいつまこし一文る
下戸ハ皆いく月のれにちきく
耳や歯やたうても花の散かるを
廿五
うぐひすやまれふ乃初午
いつやらも営るすめ四杉くに
山依にて人あらんはかしり
ふりくとらさひめけるお米車

桃灯みえく注関き冬これ
何るのと注ろん数と拾おかひ
まかし抽もいまあうれ手来
ちつしとふやうる馬子うきのやと
う床箱甲沢鉛行一かも
雨やさとそのちきるて風ちや
柳ちるうかの倒の造ふ
転るかく見てそさりれかす
宮しよ秋沢女夫広くりり
サウ
たと上るふ必くさるうやまし
柔かて共はいかしくの酒
新よの下魚備るうい嫁ふ

梧 水 梧 水 梧 水 梧 同 水 倍

水 梧 水 梧 水 梧 水 同 梧 水 全 梧

誰よりも先へ見とくとる　同

春雨のふらうの隙あえきぬし　氷

山の旦ころへと雲出出也　梧

一里乃炭舟ハ多く出　一井

かまひのちんの寝氷る　嵐浮

ききくさや正出川のうつろん　胡及

肩きぬもつれ深まに人　長虹

夕月のへきは早きき壇きハ　嵐浮

たゝくれ鍋とつゝきこゑ秋　一井

ウ

黒深く踊ニ三り　長虹

まき司妻にわかられて憂　胡及

間りるも涼み梅のみふくき　一井

蓄の蘇とゝき々切わく文　嵐浮

うらくと寝起ふかうに湯とるも　胡及

宮くゆく夜半の越乃名細　長虹

たふるのわよぎ衣あひてハらおは　嵐浮

蛤よりハうき女中ふ利　一井

浦風に酔ゆまくる周涼し　長虹

みるもかしこき紀伊の小温泉　胡及

名若のさし矢射らへおる花の陰　一井

蒜くふ香も遠ざかるなり　嵐浮

はるのくれあらまきもしくん　胡及

遊子乃錦乃裾に落つく　長虹

蒜ハ

十五

ちからしある内もさいしきと洸　嵐浮

疱瘡名とある娘子を詠り　一冊

木むきさらにあるうきおもしれの枝　老虹

称よする人し、方の魁　胡及

此年にながむとて鉄の詩も奇来　一冊

清らくもなきはつい夜の庭　嵐浮

昔ちらく流子の法のられ宗英　胡及

こまきさらあやすよ志はし萩のそ　老虹

沖の秋入堂の気のそかる　嵐浮

穀引しふる人の足音　一冊

サウ
毒ありとも瓜一きれも喰ぬし　老虹

疔風るちらく見られ　向ラ雨　胡及

桜あきさく踏ミ下るよ庭の灣　一冊

ともののぬけかる思来唐也　嵐浮

めくらくと旧足の志られぬ花畫　老虹

見ひるるでおしろたうまつしさし　胡及

[redacted]

董月堂書畫

[redacted]

抑それ流行の道ハさまさまにて千尋の浪風
立けて富士山の高ねものにもあらはなる
ふちかゝれはいさゝ波をたてゝ其心はなかるゝ
かゝるもの角なきあらはれて秋津洲のならひ
つゝきまゝかたれはよそにしあまりと云てし
人詠ハさまさまのこゝろを種として
うハあまし心はことにかはしとをりしに
歌人ともにあかつきにかうかふくみまれ
由ふ枝の露ともなりし鶯も蛙も
萬人もかしこくなかに詠ミまして神

受入 36. 3. 14

のちにおもふに利くさえたへきもあらむとも
おもひ給ひしけれどもあられぬつゆもかく
やうやくこゝろに思ひあはせまゐらせて
おのつからかきおくるへしこの
こゝろもかりてふかのめおける七ちのふくる
と一おほくを刻して世にひろくその黒
繪をもしめしてゆかしきふみおほかるし

大鵬館主人かいふ

安らけく永きえうのとし

長[illegible]氏

安永三年甲午冬十一月吉旦

東都書肆
山崎金兵衛
冨田新兵衛

皇都書舗
西村市郎右衛門
野田治兵衛
井筒庄兵衛